

愛知学院大学考古学発掘調査報告22

岐阜県可児市

大萱窯跡群 牟田洞窯跡

第1・2次発掘調査概要報告書

2016.3

愛知学院大学文学部歴史学科

愛知学院大学考古学発掘調査報告22

岐阜県可児市

大萱窯跡群 牟田洞窯跡

第1・2次発掘調査概要報告書

2016.3

愛知学院大学文学部歴史学科

例　　言

- 1 本書は、岐阜県可児市久々利柿下入会352番地に所在する大萱窯跡群・牟田洞窯跡の第1次・第2次の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は可児市教育委員会が主体となり、愛知学院大学文学部歴史学科考古学コース教授藤澤良祐がこれに協力するという形態で行われた。平成25年度に実施した第1次調査は、3年次の「考古学専門実習B」の専攻生である亀谷沙莉・宇佐美幸加・加賀誠治・北岡久実・長谷川恵子・服部梓・廣瀬允人・福田真也・堂込健介・松本奈穂、2年次の「考古学基礎実習B」の専攻生である石浜莉那・伊藤真央・垣見太郎・片岡優歩・片山尚樹・加藤友也・濱崎健・半場千晴・日比野将之・宮田実歩・森秀人・山本駿の参加のもと、平成25年9月2日から9月7日にかけて実施した。
平成26年度に実施した第2次調査は、3年次の「考古学専門実習B」の専攻生である石浜莉那・伊藤真央・垣見太郎・片岡優歩・片山尚樹・加藤友也・濱崎健・半場千晴・日比野将之・宮田実歩・森秀人・山本駿、2年次の「考古学基礎実習B」の専攻生である上田悠太・木藤穰・小林万容・佐藤美鈴・鈴木愛実・堀上夏穂・高野夏姫・堀内有・三ツ本樹純が参加のもと、平成26年8月18日から9月5日にかけて実施した。
- 3 発掘調査にあたって、可児市教育委員会の長瀬治義・長江真和氏・荒川豊蔵資料館の加藤桂子氏をはじめ、丸山組・元久々利組の皆様には、調査に対してご理解をいただき格別なご配慮を賜った。なお、平成26年度の発掘調査には、本学文学研究科院生の山本智子・栗野晋・森まさか、同研究生の小山美紀、本学歴史考古学専攻卒業生の岩月あすか・佐々木暉・杉山康・鶴見陽・太田良平・杉山敦亮、同4年生の宇佐美幸加・加賀誠治・北岡久実・長谷川恵子・服部梓・廣瀬允人・福田真也・堂込健介・松本奈穂の参加を得た。
- 4 出土遺物の整理および報告書の作成は、引き続き専攻生によって4年次の「考古学専門演習B」、および3年次の「考古学基礎演習B」を利用して平成25年9月から平成28年1月にかけて実施した。また、平成27年4月からは2年次の「考古学基礎講読B」の一環として、井上雄介・勝野友陽・加藤竜生・田口茅依・中田智也・長繩憲治・前田真奈・松岡里奈・脇田遼が参加した。
- 5 本書は専攻生が分担して執筆し、執筆者名は文末に明記した。編集は藤澤と大学院生の森まさかが行った。
- 6 発掘調査に係わる記録類は、愛知学院大学文学部歴史学科考古学整理室に保管している。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 大萱窯跡群について.....	4
第1節 美濃窯における大萱窯跡群.....	4
第2節 大萱窯跡群の研究史.....	4
第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）.....	8
第1節 第1次調査（平成25年度）.....	8
第2節 第2次調査（平成26年度）.....	8
第5章 検出された遺構と出土遺物.....	10
第1節 第1次調査6トレンチ.....	10
第2節 第2次調査1グリッド.....	21
第3節 第2次調査2グリッド.....	33
第4節 第2次調査3グリッド.....	38
第6章 小結.....	51
第1節 大窯製品の編年的位置付け.....	51
第2節 各調査区の性格.....	52
引用・参考文献.....	58
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	岐阜県可児市位置図	1
第2図	旧可児市の地形	2
第3図	旧可児市の地質	3
第4図	土岐川以北の大窯・連房式登窯分布図	4
第5図	牟田洞窯跡調査区配置図	7
第6図	第1次調査6トレンチ遺構図	11
第7図	第1次調査6トレンチ出土遺物(1)	13
第8図	第1次調査6トレンチ出土遺物(2)	17
第9図	第1次調査6トレンチ出土遺物(3)	19
第10図	第2次調査1グリッド遺構図	22
第11図	第2次調査1グリッド出土遺物(1)	25
第12図	第2次調査1グリッド出土遺物(2)	28
第13図	第2次調査1グリッド出土遺物(3)	31
第14図	第2次調査1グリッド出土遺物(4)	32
第15図	第2次調査2グリッド遺構図	34
第16図	第2次調査2グリッド出土遺物	37
第17図	第2次調査3グリッド遺構図	39
第18図	第2次調査3グリッド出土遺物	42
第19図	第1・2次調査拓本	44

写真図版目次

図版1	第1次調査6トレンチ関係
図版2	第2次調査1グリッド関係(1)
図版3	第2次調査1グリッド関係(2)
図版4	第2次調査2グリッド関係(1)
図版5	第2次調査2グリッド関係(2)
図版6	第2次調査3グリッド関係(1)
図版7	第2次調査3グリッド関係(2)
図版8	第1次調査6トレンチ出土遺物(1)
図版9	第1次調査6トレンチ出土遺物(2)
図版10	第1次調査6トレンチ出土遺物(3)
図版11	第2次調査1グリッド出土遺物(1)
図版12	第2次調査1グリッド出土遺物(2)
図版13	第2次調査1グリッド出土遺物(3)
図版14	第2次調査1グリッド出土遺物(4)
図版15	第2次調査2グリッド出土遺物
図版16	第2次調査3グリッド出土遺物

表目次

第1表	第1・2次調査大窯製品個体数	45
第2表	第2次調査出土遺物台帳	46
第3表	第1次調査6トレンチ出土遺物計測表	47
第4表	第2次調査1グリッド出土遺物計測表	48
第5表	第2次調査2グリッド出土遺物計測表	50
第6表	第2次調査3グリッド出土遺物計測表	50
第7表	瀬戸美濃大窯編年表(1)	54
第8表	瀬戸美濃大窯編年表(2)	55
第9表	瀬戸美濃大窯編年表(3)	56
第10表	瀬戸美濃大窯編年表(4)	57

第1章 発掘調査に至る経緯

愛知学院大学文学部では、平成14年度に歴史学科に考古学コース（先史考古学・歴史考古学）を開設し、新入生が3年次となる平成16年度には、考古学の基礎技術を習得するための必修科目として「考古学実習」を開講し、合宿形式により遺跡の発掘調査を実施することになった。そして平成18年度からはより高度な技術習得のため、従来の「考古学実習」を、2年次の「考古学基礎実習」と3年次の「考古学専門演習」に分離し、2年次から発掘調査に参加することになった。調査地の選定にあたって、本学が所在する東海地方は古代以来の窯業生産の中心地域で、数多くの窯跡が分布し古くから考古学的調査が行われていること、近年では中世窯・近世窯の生産や流通に関する調査研究が盛んであることから、歴史考古学専攻では窯業遺跡の発掘調査を実施したいと考えていた。

はじめに発掘調査に着手したのは岐阜県中津川市に所在する中津川窯で、中世中津川窯は昭和33年に発掘調査が初めて実施され研究の歴史が古いにも拘らず、生産の実態について不明な点が多いことから、中津川市教育委員会の協力のもと、考古学実習の初年度に当たる平成16年度には尻無1号窯跡の試掘調査を、平成17年度には上県2号窯跡の試掘調査を実施した。このうち上県2号窯跡は窯の遺存状況が良好であったため、平成18年度から平成24年度にかけて5基の窯の発掘調査を行い、平成25年度には実測図を作成し一応の調査が終了した（愛知学院大学2006～2015）。

さて平成24年度以降、歴史考古学専攻では次なる調査地の選定を進めていたが、そのような折、可児市教育委員会より、岐阜県指定史跡である大萱窯跡群（美濃窯跡群大萱支群）の国指定史跡を目指すため、指導組織として「大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会」を設置し、発掘調査を実施したいので可児市に協力できないかとの打診があった。大萱窯跡群は、半田洞・大萱窯下・弥七田の3窯跡から構成され、昭和初期には半田洞窯跡は荒川豊蔵氏、大萱窯下窯跡は加藤唐九郎氏によって調査されており、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といいったいわゆる桃山茶陶を生産した窯跡群として著名である。しかし出土遺物については多くの著書で紹介されているにも拘らず、正式な学術調査は実施されていないことから、遺跡や遺構の実態については不詳といわざるを得ない。また隣接する土岐市では元屋敷窯跡をはじめ多くの大窯や連房式登窯の発掘調査が行われ実態の解明が進んでいるが、可児市域では当該期の窯跡の発掘調査は皆無であり、美濃窯岐阜川以北における桃山茶陶生産の地域性を考える上で極めて重要な発掘調査となることは確実であった。

そこで歴史考古学専攻としては、可児市教育委員会に協力するという形態で「考古学実習」を行うこととし、半田洞窯跡について、平成25年度には遺跡の範囲確認を目的として試掘坑（6トレンチ）の発掘調査を、平成26年度には工房跡の検出を目的として三つのグリッドを設定し発掘調査を実施した。
(藤澤良祐)

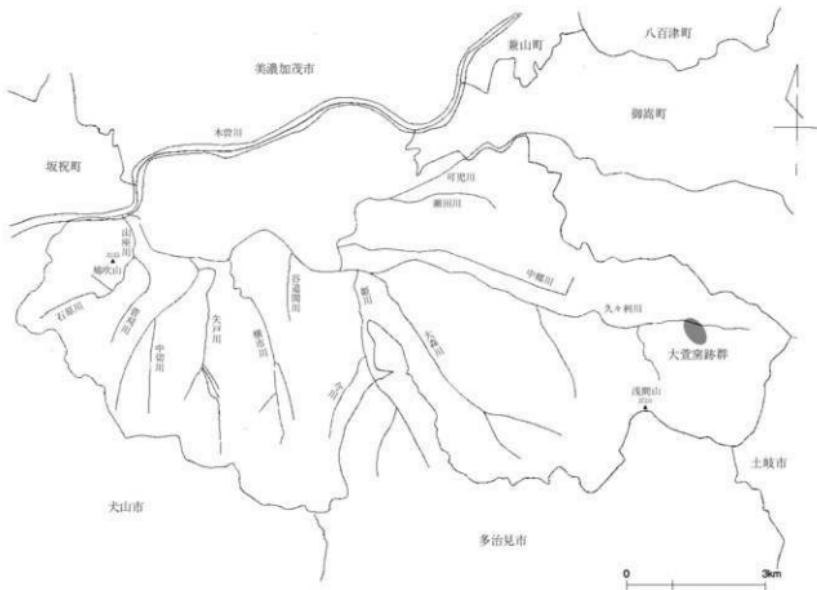


第1図 岐阜県可児市位置図

第2章 遺跡の立地と環境

岐阜県可児市は、岐阜県の中南部に位置し、中部圏の中心都市である名古屋市および岐阜県の県庁所在地である岐阜市から30km圏である。1982年に可児町が市制を施行し誕生した。2005年には可児郡兼山町を合併し現在に至る。北西部は木曽川を挟んで美濃加茂市、北東部は可児郡御嵩町、東部は土岐市、南部は多治見市、西部は愛知県犬山市と接しており、可児市の総面積は約84.9km²である。牟田洞窯跡をはじめとする大萱窯跡群（大萱支群）は旧可児市域に所在するため、ここでは旧可児市の地形と地質について概述する。

旧可児市は美濃加茂市、加茂郡坂祝町・川辺町・八百津町に広がる盆地状の地形の一角にある。市内では、木曽川左岸や可児川、久々利川の流域沿いに平地がみられ、市の北部を除くと平地の周りを山地が取り囲んでいる。標高は一番低い地点が市北西部木曽川の市内最下流地点の44m、一番高い地点が市東部の浅間山山頂372mである。北端には、木曽川が流れおり、源流は長野県木祖村の鉢盛山である。また、旧可児市をほぼ横断するように東から西に可児川が流れている。源流は、御嵩町の松野湖で、市の北西部で木曽川に合流している。東部から発する久々利川は、市の南から流れる大森川や姫川を集め、市のほぼ中央部で可児川と合流している。これらの流域は、河川の堆積作用により平地となっている。木曽川の両岸には、河岸段丘が形成され、市内においては、主に木曽川と可児川に挟まれた地域で

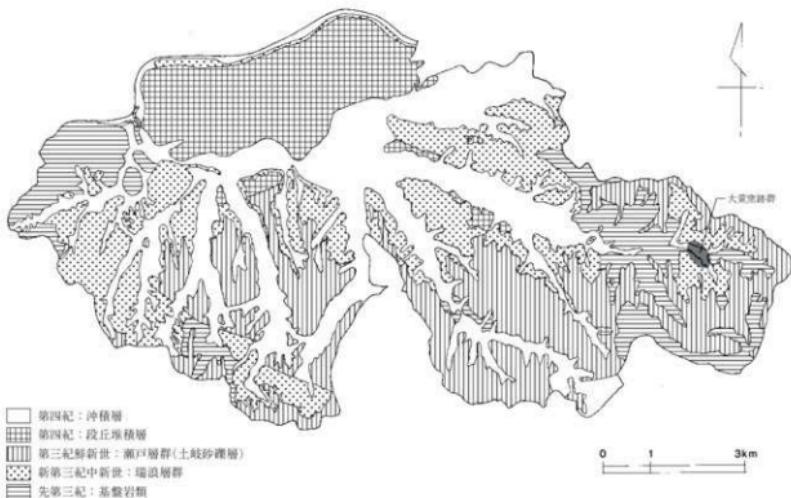


第2図 旧可児市の地形（可児市2007を基に作成）

河岸段丘独特の地形がみられる。段丘は大きく、高位段丘、中位段丘、低位段丘の三つに分けることができ、高位ほど形成時期が古くなる。また、高位段丘と中位段丘はさらに2段に、低位段丘はさらに数段に分けることができる。旧可児市の約3分の2は山地であるが、山地を形成している岩石が浸食を受けやすく、山地の標高の大部分は、150mから300mである。そのため平坦でなだらかな丘陵地となっている。標高が300mを超えるのは、市東部の浅間山と西部の鳩吹山(313m)である。この地域は、チャートなどの比較的固い岩石からできている。そのため、この地域の山地は、浸食を受けにくく谷が少ない(可児市2007)。

旧可児市とその付近の地質は、美濃帯中世層を基盤として、新第三紀の瑞浪層群・瀬戸層群・第四紀の段丘堆積物などの堆積物が覆って分布している。新第三紀の瑞浪層群は約520~2330万年前に形成され、下位から蜂屋層・中村層・平牧層に大別され、さらに中村層・平牧層は上部層と下部層に細分される。瀬戸層群は約164~520万年前に古木曾川により形成され、下位から土岐口陶土層・土岐砂礫層に大別される(可児市2007)。多治見市・土岐市・瑞浪市・恵那市・中津川市・旧可児市に広く分布し、土岐口陶土層は多治見市・土岐市付近にもっともよく発達している(斎藤1989)。しかしながら、旧可児市内には土岐砂礫層がみられるが、土岐口陶土層は分布していない。大萱窓跡群は主に瑞浪層群の平牧層の下部層に分布している。

(森村知幸)



第3図 旧可児市の地質(可児市2007を基に作成)

第3章 大萱窯跡群について

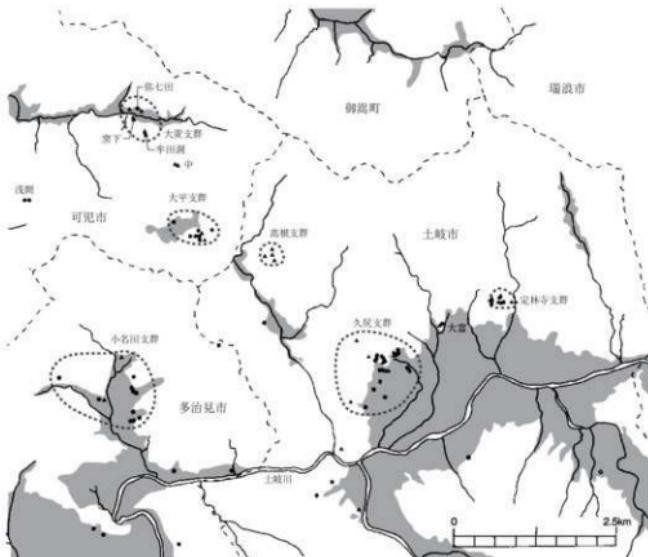
第1節 美濃窯における大萱窯跡群

土岐川以北の大窯・連房式登窯は大きく可児郡側と土岐郡側に分けられ、土岐郡側には久尻支群・小名田支群・高根支群・定林寺支群などが存在している。土岐郡側では発掘調査が進んでおり、連房式登窯初期段階の窯が多く発見されている。可児郡側には大平支群が存在しており、半田洞窯跡が位置する大萱支群もこの可児郡側に含まれる。今回調査した大萱支群には大窯では半田洞窯・窯下窯・向林窯・若林窯・岩ヶ根窯が、連房式登窯では弥七田窯が可児市史で紹介されているが、実際、窯跡が確認されているのは半田洞窯跡・窯下窯跡・弥七田窯跡のみである（可児市2005）。

第2節 大萱窯跡群の研究史

1. 戦前の研究

大萱窯跡群の研究は昭和15年（1930）、陶芸家で後に入間国宝となる荒川豊蔵氏が、名古屋でみた志野筈繪向付と同じ絵の陶片を、半田洞窯跡で発見したことに始まる。当時、桃山茶陶は窯跡の実態が不明のまま、瀬戸で焼かれたといわれていた。しかし、向付の高台に米粒ほどのトチンの赤土が付着しており、瀬戸で使用されるトチンには赤土を用いないため、荒川氏はこの通説に疑問を抱いた。そして、美濃の大平で織部の陶片を拾ったことを思い出し、大萱半田洞で志野の陶片を見つけ、桃山茶陶は美濃で焼かれていたことが明らかとなり、大萱窯跡群は多くの人に知られるところとなった。そしてその後、



第4図 土岐川以北の大窯・連房式登窯分布図（高橋他2006を一部改変）

大発掘ブームが起ることとなる。

昭和7年（1932）、陶芸家の加藤唐九郎氏は大萱窯下窯の発掘調査を行い、窯下窯で多くの黄瀬戸を焼成していたことを判明した。その中で「文禄二年八月」（1593）銘の黄瀬戸皿が出土し、焼成年代を決める貴重な資料が発見された。そして加藤氏は黄瀬戸を壺手・ゲイ呑手・アヤメ手・菊皿手の4種に分類し、その中のゲイ呑手、アヤメ手を以て本格的な黄瀬戸として扱う考えを示した（加藤1933）。

昭和10年（1936）、高木康一氏は加藤氏が行った分類を扱って、アヤメ手のみを黄瀬戸とし、志野とともに黄瀬戸を焼成しない窯をA類に、焼成する窯をB類に分類した。志野では無地志野・線刻志野・鼠志野・赤志野・紅志野・練上手志野の6種に分類を行い、さらに黄瀬戸とともに志野を焼いている窯をA類に、黄瀬戸がみられない窯をB類に、さらにA類・B類でみられたいわゆる桃山茶陶の志野ではないものを焼いている窯をC類に分類を行った。この志野C類は土岐川以南の恵那郡側に立地する窯であり、志野A類（黄瀬戸B類）の窯では黄瀬戸が志野より下層から出土していたことから、加藤氏は志野A類・B類・C類を時期差と考えていたと推測される。織部では織部黒・青織部・赤織部・白釉手織部の4種に分類して、織部全盛期で優れたものを焼いている窯をA類に、織部末期頃のものだが精巧もののを焼いていた窯をB類に、B類より下手物を焼いていた窯をC類に分類し、同様に時期差と考えていたと思われる。瀬戸黒は分類こそ行われていないものの、技法や形態的特徴のほか織部の窯から出土する黒茶碗を織部黒・黄瀬戸・志野窯から出土する切立形の底の平らな茶碗を瀬戸黒とすると、瀬戸黒は黄瀬戸A・B類及びC類以外の志野の窯で焼かれているとしている。この中で、牟田洞窯跡・大萱窯下窯跡は黄瀬戸B類・志野A類に、弥七田窯跡は織部A類に分類されている（高木1936）。

同年、加藤唐九郎氏は『美濃古文書』の紹介を行っている（加藤1936）。その中の「大萱窯之記」によると、大萱には窯之坂窯（源十郎控窯・現在の牟田洞窯）に5基、窯下窯（四右衛門窯）には2基、岩ヶ洞窯（伝七窯）には1基、向林窯（徳右衛門窯）には2基、若林窯（志郎三郎窯）には2基、八剣招窯（忠蔵窯・現在の弥七田窯）には1基の窯があったと記されている^(注1)。この美濃古文書の紹介により、文献における研究が活発に行われる契機となっていくのである。

2. 戦後間もなくの研究

昭和28年（1953）、加藤土師萌氏は織部焼を体系的にまとめ、志野を高木氏の分類に絵志野を加えた7種に、織部を青織部・鳴海織部・赤織部・黒織部・志野織部・伊賀織部・唐津織部の7種に分類した。この中で志野の発祥を牟田洞窯に求めており、青織部系の窯は久尻・大平・大富とまとまっているのに対して、大萱に属する弥七田窯は若干距離を置いているもので、他の青織部に比べ特異性のあるものを焼いていると評している（加藤1953）。

昭和41年（1966）、一瀬武氏は開祖である源十郎景成の大萱開窯時期に関して、景春系譜では景春の三男で大萱開業は天正5年（1577）となっているのに対し、大平系譜では景豊の二男で開窯は慶長6年（1601）となっており、これは天正14年ごろ笠原町へも行っていることなどから混同視されているのではとの指摘を行った（一瀬1966）。また大萱支群について、「中窯は志野、黄瀬戸を焼き、牟田洞は最も古い窯で黄瀬戸、天目、志野、織部を焼いている。窯下の黄瀬戸は大平・浅間よりも新しいがその製品は技術的にすぐれているようである。弥七田は織部、黒織部を焼き、」と相対的な操業順序を述べている。

3. 『美濃の古陶』の研究

昭和48年（1973）、橘崎彰一氏を中心として美濃古窯研究会が結成され、昭和51年（1976）に『美濃

の古陶』が刊行された。これは昭和44～46年にかけて中央自動車道建設に伴い行われた発掘調査によって、考古学的研究が進み、古代から近世に至る美濃窯業史の流れと問題点を段階ごとにまとめたものであった。この中で植崎氏は大窯をⅠ期からⅤ期に細分し、Ⅰ期には小名田窯下1号窯、Ⅱ期には藤四郎窯・妙土窯、Ⅲ期には尼ヶ根窯1号窯・定林寺東洞1号窯、Ⅳ期には山之神窯・浅間窯、Ⅴ期には牟田洞窯・大富西窯を標識窯として設定した。そして、Ⅰ期が16世紀の初頭に、Ⅲ期が天文年間に、Ⅳ期が天正以前、Ⅴ期が天正年間に展開したと推測し、各期におおよそ20年の幅を与えている。またⅢ期に瀬戸黒が、Ⅳ期に灰志野・黄瀬戸が、Ⅴ期に志野が出現するとしている（植崎1976）。

そして、今井静夫氏は美濃大窯の分布と立地についてまとめており、窯体規模・品種・製造技術から主に志野製品の主体として大きく3期に分けている。大窯で試作期の志野製品が登場する以前の窯として、笠原町妙土・陶ヶ丘・グミノ木・窯下1号・窯下2号・土岐津町藤四郎・丸石東・深沢・赤サバ・東洞1号・駄知町坊洞・有古・小名田窯下1号・白山・尼ヶ根1号・陶町田尻下窯が挙げられている。次段階には志野試作期の窯として、尼ヶ根2号・大平山之神・中窯の1基・定林寺西洞1号・隠居屋・隠居西・元屋敷付近の1基・妻木窯下3号・牟田洞の1基が挙げられ、地域によって若干隔りがみられる指摘している。志野最盛期の大窯が集中し桃山茶陶を代表する窯場としては、大萱・大平・久尻・陶地域が挙げられており、特に秀品の志野を焼いている窯場は大萱で、大平・久尻が次に次ぐものであり、このことは大窯から連房式登窯へと繋がる深い関係があると推測している^(註2)（今井1976）。

4.『美濃の古陶』以降の研究

昭和63年（1988）、井上喜久男氏は植崎氏のⅤ期区分の基準となった資料を紹介し、牟田洞窯跡や窯下窯跡を最終のⅤ期にあたる見解を示した（井上1988）。

翌年には、斎藤基生氏が荒川豈藏氏の収集品で牟田洞窯跡出土と断定できるものだけを扱って、遺物の報告を行っており、焼成器種や特徴、窯体から牟田洞窯跡の操業期間は從来言われている16世紀後半の、井上氏と同じく大窯Ⅴ期に該当するものであると述べている（斎藤1989）。

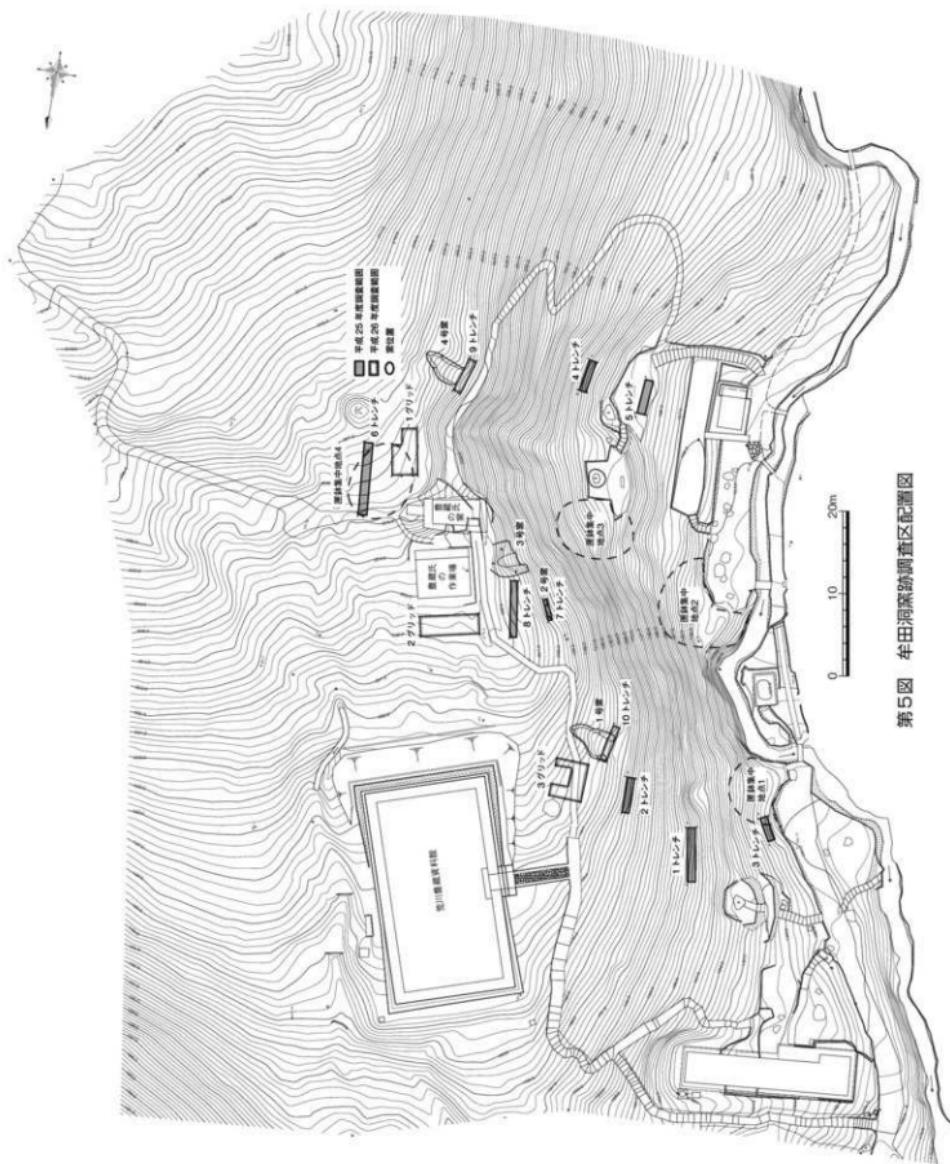
平成5年（1993）、田口昭二氏は美濃連房式登窯の編年を行ってⅤ期9小期に細分し、弥七田窯跡を連房式Ⅰ期の後半位に位置付けている（田口1993）。

『可児市史』では、各窯の出土遺物について述べられており、大窯では藤澤良祐氏の瀬戸美濃大窯編年を（藤澤2002）、連房式登窯では田口氏の編年を使用し、これらの編年から大萱窯下窯は大窯第4期～連房式登窯第Ⅰ期、牟田洞窯は大窯第4期、弥七田窯は連房式登窯第Ⅰ期～第Ⅱ期に相当するものとしている（可児市2005）。

美濃の大窯期後半から連房式登窯の初期の窯場の調査は、土岐郡側の久尻地区では発掘調査や研究が盛んに行われてきたが、可児郡側では窯の調査が行われておらず、可児郡側での窯の実態を探ることが、今後の研究に必要となっている。（森 まどか）

（註1）昭和40年（1965）には荒川豈藏氏が志野を体系的にまとめ、古文書等から志野の起源と名称を考察している。また、荒川氏は大萱にみられる牟田洞窯・窯下窯・中窯・弥七田窯について、「大萱窯之記」にある「窯之段窯」源十郎控窯が牟田洞窯、「若林窯」「門林窯」がおそらく中窯であるとしている。志野の分類に関しては無地志野・絞志野・鼠志野・赤志野・紅志野・ねりこみ志野の6種に分類している（荒川1965）。一方、奥穂氏は荒川氏の考えとは異なり、若林窯・向林窯を中窯とは別のものと考えている（奥穂1971・1976）。そして『可児市史』では、若林窯・向林窯は中窯と別ものとされており、現在ではこの考えが主流であるが、若林窯・向林窯に関する調査では窯体が滅失しているため、不明のままである（可児市2005）。

（註2）なお、奥穂宋龍氏は大萱窯跡群の年代観について、牟田洞窯跡は志野全盛期の窯であり焼成年代最下限を文禄2年頃に、窯下窯は黄瀬戸・志野を焼成した窯で焼成年代は1585～1600年頃に、弥七田窯は絞志野や織部、美濃青磁などの代表的なものを焼成しており焼成年代は1610～1630年頃の窯と推測している。向林窯は明治初期に破壊され消滅してしまったが、田畠一面から出土した陶片から1585～1600年頃までと推定され、絞志野では牟田洞窯・窯下窯にはないものがあり、久尻元星敷窯とやや時期が重なるものとしている。若林窯は窯下窯と向林窯出土の遺物に類似し、年代は同じころのものと示している（奥穂1976）。



第5図 牟田洞聚跡調査区配置図

第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）

第1節 第1次調査（平成25年度）

9月2日（月）雨

午前9時に大学に集合し現場に向けて出発したが、現地は降雨のため作業は中止となった。

9月3日（火）曇りのち雨

牟田洞窓跡の遺跡範囲を確定するため、荒川豊蔵氏の窯および作業場の東側の区域周辺の草刈り、放置されていたトタン板の除去等清掃作業を行うとともに、窯道具等の遺物採集を行った。

9月4日（水）雨のち曇り

一応の清掃作業が終了したため、全景写真を撮り、撮影後調査区域に1.5m 間隔で杭を打ち1.5m × 9.2m 幅のトレーニングを設定した。可児市教育委員会との調整により6トレーニングと命名された。

9月5日（木）晴れ

腐植土および暗赤褐色土から多量の窯道具類を含む陶片が出土したが、下層の褐色土には遺物がみられず多量の礫が含まれていたため掘削をやめた。

9月6日（金）晴れ

トレーニング床面および壁面の清掃を行い、写真撮影を行った。6トレーニングの南側にある直径4mほどの穴（土坑）の清掃を行った。遺物の採集を行った。

9月7日（土）晴れ

発掘調査最終日。6トレーニングの東壁・北壁・南壁の土層断面図を作成し、第1次調査を終了した。午前中には作業を終え、発掘現場から撤収した。

9月22日（日）晴れ

可児市教育委員会と合同で現地説明会を開催した。

（濱崎 健）

第2節 第2次調査（平成26年度）

8月18日（月）晴れ

午前9時に大学に集合し、発掘道具を積み込んでから現地に向けて出発した。現地に到着後、A・B・Cの3班を分け作業を開始した。A班は第1次調査の6トレーニングの埋め戻しと調査区設定場所の草刈りを行い、B班・C班も同様に調査区設定場所の草刈りと清掃を行った。

8月19日（火）晴れ時々曇り

A班の調査区を1グリッド、B班の調査区を2グリッド、C班の調査区を3グリッドと命名し、各班とも設定したグリッドの写真撮影を行ったのち発掘作業を開始した。

8月20日（水）晴れ

各班とも腐植土の除去を行ったのち、写真撮影を行った。その後、引き続き遺構面の検出を目指して作業を進めた。

8月21日（木）晴れ

1グリッドでは赤褐色土が検出され、これを地山として引き続き作業を進めた。2グリッドでは西側から地山と思われる赤褐色土が、東側からは黄色土が検出され、数ヶ所に土坑が確認された。3グリッドでは掘り下げ作業を進めた。

8月22日（金）晴れのち曇りのち雨

1グリッドでは壁面及び床面を清掃した後、写真撮影を行った。その後、東壁の土層断面図の作成を開始した。また平坦面が確認されたため、さらにグリッドを東に拡張した。2グリッド・3グリッドはさらに掘り下げを進め、遺構面の検出を目指した。

8月23日（土）晴れのち曇りのち雨

雨のため、午前中に荒川豊蔵資料館を見学した。天気が回復したのち、引き続き1グリッドは東壁の土層断面図の作成を行い、2グリッド・3グリッドは遺構面の検出作業を行った。

8月24日（日）曇り時々雨

1グリッドでは拡張部分の掘り下げを開始した。2グリッド・3グリッドでは地山の検出を進めつつ、検出が完了したところから清掃を開始した。

8月25日（月）晴れ時々曇り

1グリッドでは拡張部の掘り下げを行った後、壁面と床面の清掃をし、写真撮影を行った。その後は再び掘り下げを進めた。2グリッドでは清掃を完了させた。3グリッドでは遺構面の検出を完了させ、清掃を開始した。東壁の土層断面図を作成し、平坦面が確認され遺構が検出されたため、グリッドを東へと拡張し掘り下げを行った。

8月26日（火）雨

1グリッドでは拡張部分の掘り下げを進め、地山及び遺構の検出を目指した。2グリッドでは西壁の土層断面図の作成をしつつ、北東隅の土坑の検出を行った。その後、割付を開始し、平面図の作成を行った。3グリッドでは西壁の土層断面図の作成しつつ、引き続き拡張部の掘り下げを行った。

8月27日（水）曇り

1グリッドでは拡張部の東壁の土層断面図を作成した。また清掃を行い、割付を開始した。2グリッドでは平面図及び南壁の土層断面図の作成を進めた。3グリッドでは拡張部の遺構面の検出を行った。

8月28日（木）雨のち曇り

1グリッドでは平面図の作成を開始した。2グリッドでは北壁と東壁の土層断面図と遺構の断面図を完成させた。3グリッドでは拡張部の遺構面の検出を完了させた。

8月29日（金）晴れ

現場保護のため各グリッドにブルーシートを掛け、遺物や機材を運び出し発掘現場から撤収した。

9月2日（火）～9月5日（金）晴れ

残った土層断面図及び平面図を完成させ、第2次調査を終了した。

9月20日（日）晴れ

可見市教育委員会と合同で現地説明会を開催した。

(木藤 積)

第5章 検出された遺構と出土遺物

第1節 第1次調査6トレンチ

A 遺構の概要

1. 第1次調査の調査概要

幸田洞窯跡では、可児市教育委員会によって窯跡3基が調査されており、平成25年度から翌26年度にかけて、遺跡の範囲確認のためトレンチを入れて調査が行われた。トレンチは7ヶ所に設定され、その内愛知学院大学歴史学科考古学ゼミが平成26年度に荒川豊蔵氏の窯の東側の尾根付近に南北92m、東西15mのトレンチを設定し、6トレンチの調査を行った（第1次調査）。なお、遺構は確認されなかった。

2. 6トレンチの土層堆積状況

6トレンチの東壁の土層断面図は3面提示した（第6図）。A点の標高は205.183m、B点は206.650m、C点は206.490m、D点は205.150mである。土層は、①～④層が確認された。東壁は2～3cmの①黒褐色土の下層に、北側では10～40cmの②暗赤褐色土が堆積しており、南側では10～40cmの③褐色土が堆積をみせる。③層は中央で②層の下に入り込んでいる。北側にはさらに下層に10～30cmの④褐色土が堆積している。北壁は①②③層の順に、南壁は①③の順に堆積をみせる。なお、③④層は疊を多く含んでいることから、地山の可能性がある。
(伊藤真央・半場千晴)

B 出土遺物の概要

第1次調査6トレンチから出土した大窯製品は、碗類35個体、小皿類61個体、中皿・向付類21個体、調理鉢類4個体、その他7個体で、計128個体である（表1）。以下、図化したものについて器種ごとに概要を述べる。

1. 碗類

碗類には天目茶碗・筒形碗・小碗などがある。

(1) 天目茶碗（1～5）

天目茶碗はa～c類の3類に分類した⁽²⁰⁾。

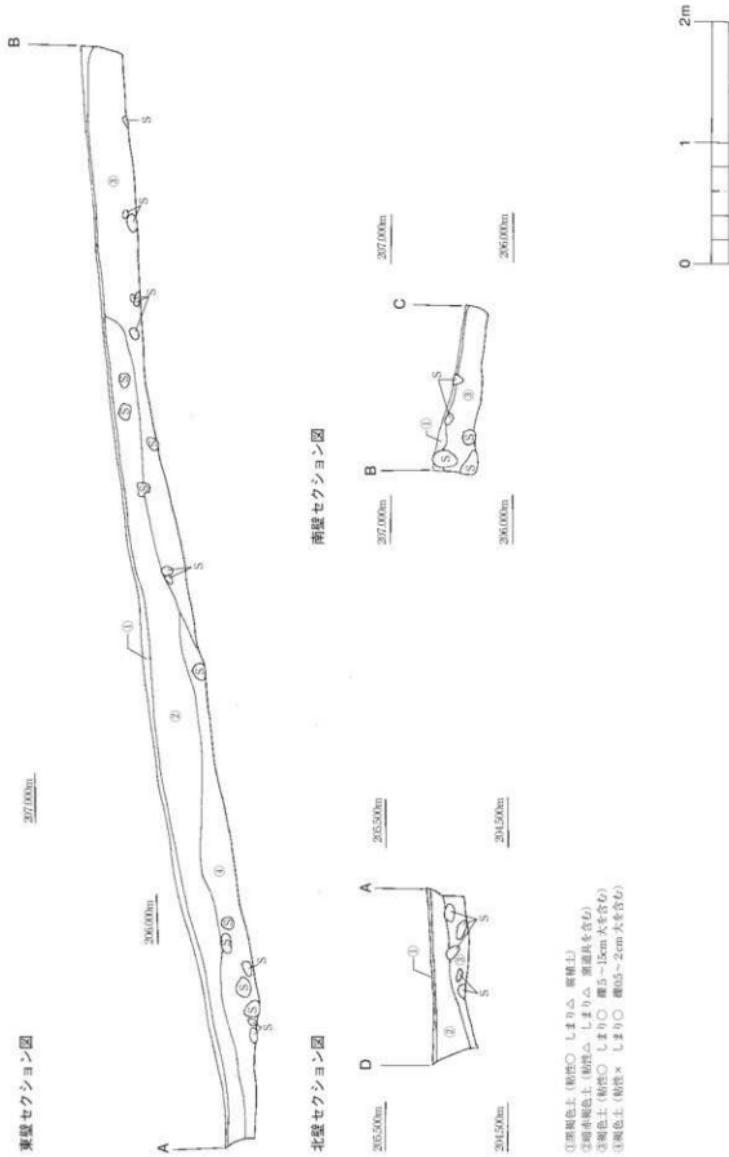
a類（1～3）は器高5.6cm、口径11.3cm、高台径4.4cm前後、削り出し輪高台の天目茶碗である。高台の断面形は外側が高くやや内傾、内側が低く僅かに外傾し、高台脇には段が形成される。体部はほぼ直線的に開き、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。なお、1は口縁端部が玉縁風に仕上げられており、2には高台端部に糸切り痕が残る。

b類（4）は器高5.7cm、口径11.4cm、高台径4.7cm、削り出し内反高台の天目茶碗である。高台の断面形は外側がほぼ直立し、内側は中心にかけてほぼ直線的に削り込まれ、高台脇には段が形成される。体部はほぼ直線的に開き、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。

c類（5）は高台部を欠くが、残存高6.0cm、口径13.0cmとやや大形である。高台脇に段が形成され、体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。全体的に器厚は薄い。

いざれも体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナダ調整され、体部内面から底部内面にかけてコテが押圧されたものと思われる。高台周辺が所々茶色になり錆釉が施された可

第6図 第1次調査6トレンチ遺構図



能性がある 4 を除き高台周辺は露胎で、いずれも高台周辺を除き鉄軸が施されており、不透明で光沢のある茶褐色から黒褐色の発色である。粒子の細かい胎土が使用され破断面は灰白色を呈する。溶着資料からみて天目茶碗は、後述する丸底匣鉢に輪ドチを敷いて 1 個ずつ焼成されている。
(森秀人)

(註) 形状により a 類(1~3)が天目茶碗 D 類、b 類(4)が天目茶碗 E 類、c 類(5)が天目茶碗 F 類に比定される(藤澤 2002)。

(2) 筒形碗(6~11)

筒形碗は全形を知る資料はないが、半筒形の A 類と切立形の B 類に大別できる。

A 類(11)は高台径 5.2cm、高台の断面形は外側が僅かに内傾、内側が緩やかに外傾した付高台である。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整されるが、高台外側にも回転ヘラ削り痕が認められる。底部内面に「茶溜り」はみられない。

B 類(8~10)のうち、8 は残存高 7.1cm、口径 11.9cm。体部下端というより高台脇が水平方向に開き、体部はほぼ直立し、口縁部は緩やかに外反する。体部下方および口縁端部は、フリーハンドによるロクロ非回転のヘラ削り調整である。体部外面にも緩方向にヘラ削り調整されるが、釉薬が厚く詳細は不明である。9 は高台径 5.6cm、断面形が長方形の付高台を有する。体部下方は直線的に開き、上方はほぼ直立する。体部下方から高台外側にかけてロクロ非回転のヘラ削り調整されるが、高台端部は一部に回転ナデ調整される。体部上方は緩方向にヘラ削り調整され、体部内面にロクロ目は明瞭で、底部内面はコテの押圧により全体に浅く凹み茶溜りが形成される。10 は高台径 5.1cm、断面形は低い逆台形である。高台脇が水平方向に開き、体部下端は丸みを持ち、上方はほぼ直立するようである。体部下方および高台内外側は回転ヘラ削り調整されるが、高台端部は回転ナデ調整されおり、付高台か削り出し輪高台か判断できない。底部内面中央は、おそらくコテの押圧により浅く凹み茶溜りが形成される。

その他(6・7)は体部上方の破片である。体部外面には緩方向にヘラ削り調整され、内面にはロクロ目が残る。口縁端部はロクロ非回転のヘラ削り調整が施され、やや角張っている。B 類と思われる。

筒形碗は、高台周辺を除き鉄軸が施され、僅かに光沢はあるが不透明で黒色の発色である。7 には口縁部にはさみ痕が残っており、焼成中に窯から引き出されたものと思われる。口縁部に長石粒を含んだやや荒目の胎土で、破断面は灰白色から黄白色を呈する。
(石浜莉那)

(3) 小碗(12・13)

12 は器高 2.3cm、口径 5.4cm、高台径 2.5cm。高台の断面形は外側が高くやや内傾、内側が低く僅かに外傾し、高台脇には段が形成される。体部は全体的に丸みを持って立ち上がり、口縁端部も丸く仕上げられる。なお、高台端部には輪ドチが付着している。

13 は器高 2.6cm、口径 5.8cm、高台径 3.1cm。高台の断面形は内外側とも低く、高台脇に段も狭い。体部下方は丸みを持つが上方の立ち上がりは強く、口縁端部は丸く仕上げられる。

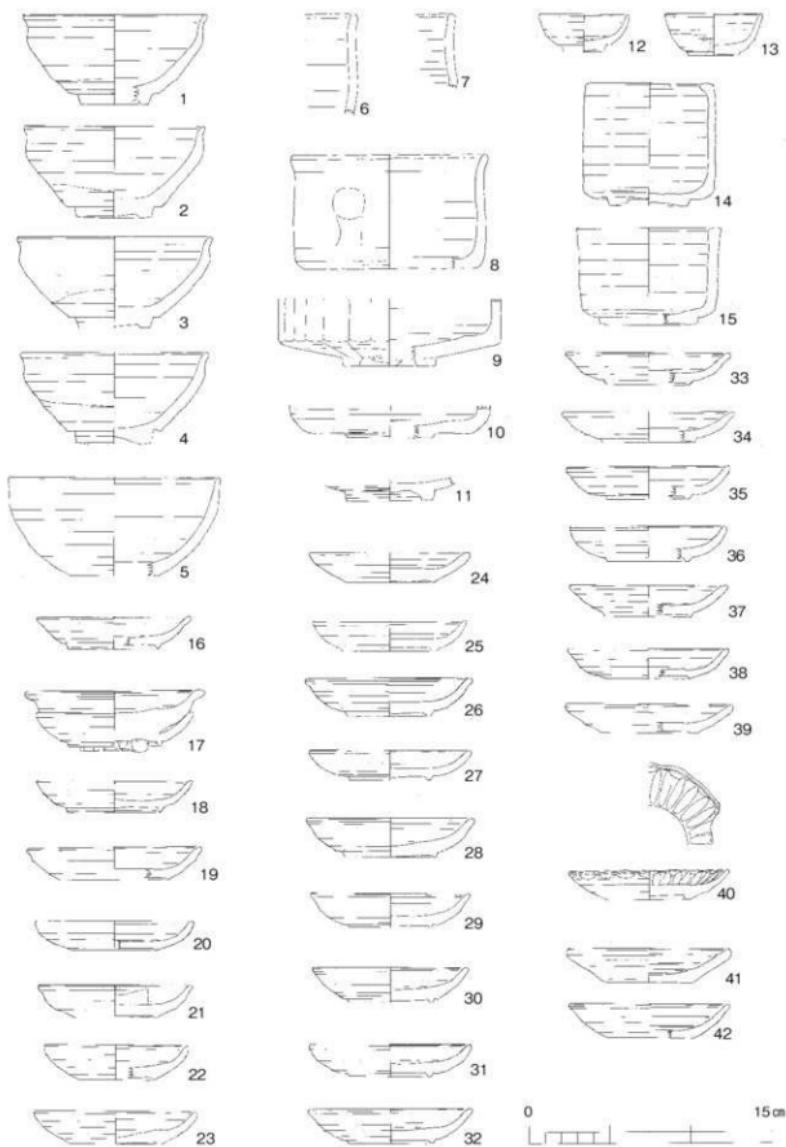
小碗は削り出し輪高台で、体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部外側には回転ナデ調整が行われ、内面にはコテが押圧されたものと思われる。高台周辺は露胎で、高台周辺を除き透明で光沢のある灰釉が施されており淡緑色から黄緑色を呈する。粒子の細かい胎土が使用され破断面は灰白色を呈する。
(宮田実歩)

2. 小皿類

器高 2cm、口径 10cm 程度の小皿類には丸皿・内禿皿・折縁皿などがある。

(1) 丸皿(16~18・20~37)

丸皿には付高台の A 類、削り込み高台の B 類、削り出し輪高台の C 類がある。



第7図 第1次調査6トレンチ出土遺物（1）

A類（16~18）は器高2.0cm、口径9.4cm、高台径5.5cm前後。高台は低く小さく、断面形は外側が内傾、内側がやや外傾する。体部は全体にやや丸みを持って開き、口縁端部は丸く取まる。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺と口縁部内外面には回転ナデ調整が行われ、内面にはコテが押圧されたものと思われる。なお17の底部外面には輪ドチに付着した匣鉢の痕跡があり、上面には匣鉢蓋が付着している。

B類（20~24）は器高1.9cm、口径9.6cm、高台径5.3cm前後。高台内が浅く削り込まれ、高台の幅が狭く、高台内が浅く削り込まれるのが特徴である。体部が全体に丸みを持つもの（20~22）、やや丸みを持って開くもの（23・24）がある。いずれも体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面には回転ナデ調整が行われ、内面にはコテが押圧されたものと思われる。なお21・24には底部外面に輪ドチの痕跡、20・22には体部下端に円錐ビンの痕跡が認められる。

C類（25~37）は器高2.1cm、口径9.7cm、高台径5.2cm前後。高台の断面形は外側が内傾、内側が外傾した逆台形状を呈する。高台の幅が広く体部の丸みが強いもの（25・31・35・36）、高台幅が広く口縁部が僅かに外反するもの（26・28）、体部下方が僅かに丸みを帯び上方が直線的に伸びるもの（29・30・32）、高台の幅が狭く先端が尖り気味で、体部の丸みが弱く口縁部が僅かに外反するもの（33・34・37）などに分類できる傾向がある。いずれも体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面には回転ナデ調整が行われ、内面にはコテが押圧されたものと思われる。

丸皿には全面に灰釉が施されており、焼成良好なものは光沢があり透明度が強い淡緑色から黄緑色の発色である。粒子の細かい胎土が使用され破断面は灰白色から淡黄色を呈する。体部下端に円錐ビンの痕跡を残し重ね焼きされたと思われるB類の20・22を除くと、A~C類とも底部外面に輪ドチの痕跡を残すものが主体であることから、後述する小形の匣鉢に輪ドチを敷き1個焼き（単独で焼成）された可能性が高い。

(山本 駿)

(2) 内禿皿（19・38~40）

内禿皿は、体部の形状は丸皿と酷似するが、底部内面に凸部が形成されたものである。6トレンチ出土の内禿皿は全て削り込み高台で、体部内面にソギのないI類とソギのあるII類とに大別される。

内禿皿I類（19・38・39）は器高2.0cm、口径10.1cm、高台径5.9cm前後で、高台幅が広く体部がほぼ直線的に開くもの（39）、高台幅が狭く口縁部が僅かに外反するもの（19）、高台の先端が尖り器厚が全体的に薄いもの（38）がある。

内禿皿II類（40）は器高2.3cm、口径9.7cm、高台径5.2cm、高台の幅が広く高台内の削り込みは深い。体部下方には明瞭な稜があり、口縁部は指で押さえによる輪花風に仕上げている。輪花にした後、体部内面には丸ノミ状工具によりソギを入れられている。

内禿皿は、いずれも体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面が回転ナデ調整され、底部内面にはコテの押圧により凸部が形成される。無釉である38を除き、灰釉が全面に施釉され、光沢があり透明性が強い淡緑色を呈する。粒子の細かい胎土が使用され破断面は淡黄色を呈する。なお38を除くと、底部内面凸部の釉薬は拭い取られており、輪ドチを挟んで重ね焼かれたものと推定される。

(森 秀人)

(3) 折縁皿（43~55）

折縁皿は、体部内面にソギのないI類とソギのあるII類とに大別される。

折縁皿I類（43~48・55）は、削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類とに分類される。B類（43

~46) は器高1.9cm、口径10.2cm、高台径5.4cm 前後。高台の幅が広く体部下端に棱が入るもの(44)、高台の先端が尖り体部がほぼ直線的に開くもの(43・45)、体部が扁平なもの(46)がある。C類(47・48・55)は器高2.1cm、口径10.6cm、高台径5.5cm 前後。高台に一定の幅を持ち、断面形は逆台形を呈し、体部が直線的に開くもの(47・48)と、高台の幅が狭く先端が尖り底部内面に凸部が形成されないもの(55)がある。後者には串状工具により二重線が引かれ、印花手法により草花文が施される。

折縁皿II類(49~54)も削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類とに分類される。B類(49~51)は器高2.0cm、口径10.7cm、高台径5.8cm 前後、高台に幅をもつものが主体である。体部下方に棱が入るもの(49)、小形で扁平な体部を有するもの(50)、体部が直線的に開くもの(51)がある。C類(52~54)は器高2.2cm、口径10.9cm、高台径5.6cm 前後、高台に幅を持つもので、体部はほぼ直線的に開く。

折縁皿は、口縁部はほぼ水平方向に挽き出され、端部は内側に折り返され玉縁状になる。また体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、体部上方から口縁部内外面にかけて回転ナデ調整され、底部内面にはコテの押圧により凸部が形成されるものが主体である。全面に灰釉が施されており、焼成良好なものは光沢があり透明度が強く淡緑色から黄緑色の発色である。緻密な胎土が使用され破断面は灰白色を呈するものが多い。なお底部内面に凸部が形成されていない55を除くと、内面凸部の釉薬は拭い取られ、底部内外面に輪ドチの痕跡を残すものが多いことから、輪ドチを挟んで重ね焼かれた可能性が高い。

(垣見太郎)

3. 中皿・向付類

上記の器高2cm、口径10cm 程の一般的な小皿類に対して、それ以外の供膳用の皿・鉢類を「中皿・向付類」として一括した。また、形状が小皿類と類似するものを「中皿類」とし、小皿・中皿類とは形状が異なるものを「向付類」とした。

(1) 灰釉中皿 (56~58)

56は器高2.4cm、口径13.0cm、高台径7.6cm、断面形が逆台形状を呈する削り出し輪高台で、体部は僅かに丸味をもって開く。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整されている。全面に灰釉が施され半透明で黄緑色を呈しており黄瀬戸製品と同様の発色である。緻密な胎土が使用され破断面は灰白色を呈する。なお内面にはボロが付着する。

57は器高3.4cm、口径13.1cm、高台径8.1cm、断面形が逆台形状を呈する高い削り出し輪高台で、体部はほぼ直線的に開く。底部内面には凸部が形成されている。全面に灰釉が施されており、焼成不良のため釉薬が充分溶けていないが、一部に黄緑色の発色がみてとれる。なお、内面凸部の釉が拭い取られているか否かは不明である。

58は器高2.4cm、口径13.1cm、高台径7.1cm、断面形が逆台形状を呈する削り出し輪高台で、体部は僅かに丸味をもって開く。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、底部内面にはコテの押圧による凸部が形成されている。全面に透明度の高い淡緑色の灰釉が施されるが、内面凸部の釉薬は拭い取られている。緻密な胎土が使用され破断面は灰白色を呈する。

(2) 志野中皿 (59)

志野中皿は器高3.1cm、口径15.6cm、高台径8.2cm。高台の断面形は先端が尖った三角形状を呈する付高台で、体部は全体に丸みを持って開く。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面および高台周辺は回転ナデ調整され、内面はコテが押圧されたものと思われる。器厚は全体に薄く、

器面全面に長石釉が施されており、不透明ではあるが光沢があり白色を呈する。緻密な胎土が使用され破断面は淡黄色を呈する。

(3) 黄瀬戸向付 (63・65・66)

63は器高5.1cm、口径14.4cm、底径10.6cm。高台は断面形が逆台形を呈する削り出し輪高台で、体部下方は直線的に開くが、中央付近で丸みを帯び上方はほぼ直立する。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、体部中央から上方にかけて内外面には回転ナデ調整されている。全面に灰釉が施されており、光沢があり透明性が強い黄緑色の発色である。胎土は密で、破断面は淡黄色を呈する。

65は高台径7.6cm、断面形が逆三角形を呈する低い付高台で、体部下方は直線的に開いており、上方は直立するようである。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整される。底部内面にはヘラ状工具により草葉文が描かれ、全面に灰釉が施されており、焼成やや不良のため、光沢はあるが不透明で黄緑色の発色である。なお、葉の部分には所々に綠釉が落とされており、いわゆる「胆鬱（タンパン）」手法が認められる。胎土はやや密で、破断面は淡黄色を呈する。

66は高台径10.0cm、断面形が逆三角形を呈する低い付高台で、体部下方はほぼ水平方向に開いており、上方は直立するようである。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整される。底部内面にはヘラ状工具により草花文が描かれる。全面に灰釉が施されており、焼成やや不良であるが、やや光沢があり透明性のある黄緑色の発色である。胎土は密で、破断面は灰白色を呈する。

(4) 志野向付 (60~62・64)

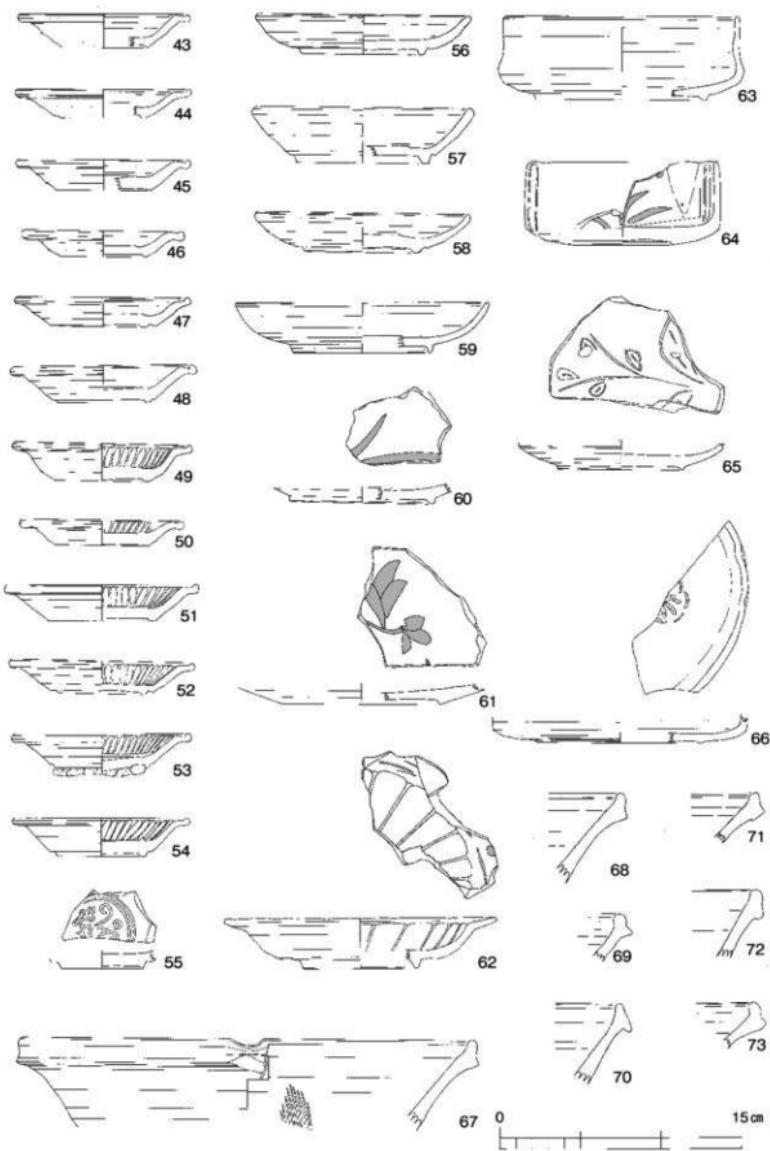
60は高台径9.0cm、断面形が逆台形の付高台を有する。底部外面は回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整される。内面には鉄絵による草文が描かれ、黒色の発色である。全面に長石釉が施されており、やや光沢があり不透明な白色の発色である。胎土はやや密で灰白色を呈する。

61は高台径9.9cm、先端が尖る削り込み高台で、体部下方は直線的に開く。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整される。内面には鉄絵で草花文が描かれ、茶色の発色である。全面に長石釉が施され、やや光沢があり不透明で白色の発色である。粗い貫入が認められる。胎土はやや密で白色を呈する。底部外面には輪ドチの痕跡が残る。

62は皿形態の向付で、器高3.1cm、口径16.6cm、高台径7.1cm。断面形が逆三角形の付高台で、体部下方は水平方向に開き、体部中央にも稜があり口縁部は大きく外折する。体部中央は回転ヘラ削り調整、高台周辺および口縁部内外面は回転ナデ調整され、口縁端部をヘラでカットし輪花風に仕上げている。内面には丸ノミ状工具によるソギが入り、口縁部上面には鉄絵が描かれる。全面に長石釉が施されており、光沢はあるが不透明で白色から灰白色の発色である。胎土は密で、破断面は灰白色を呈する。

64は「角向付」で、器高5.1cm、口径13.5cm、高台径6.1cm。先端が尖る削り込み高台で、体部下方は直線的に開く。体部上方は、内面はロクロ成形後におそらく型打ちし、外面四隅を押さえることにより方形に仕上げている。体部下端から底部にかけて回転ヘラ削り調整、体部下方にはロクロ非回転のヘラ削り調整が施されるが、体部上方の調整は釉薬が厚いためよく判らない。体部外面には鉄絵による草花文が描かれ、黒色の発色である。全面に長石釉が施されており、光沢があり不透明で白色の発色である。粗い貫入も見られる。胎土は密で、破断面は淡黄色を呈する。底部内部には円錐ピンの痕跡が残る。

(片岡優歩)



第8図 第1次調査6トレンチ出土遺物（2）

4. 調理鉢類

「中皿・向付類」とした供膳用の皿類や鉢類に対して、擂鉢・片口など調理用の鉢を「調理鉢類」として一括した。

(1) 擂鉢 (67~73)

大窓段階の擂鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるⅠ類と、口縁部が内側に折り返されるⅡ類とに大別されるが、6トレンチではⅠ類のみが確認されている。出土量が少ないため縁帯周辺のみを図化した。底部は糸切り痕未調整の平底で、体部は直線的に開き外面にはロクロ目が明瞭である。口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類した。ただし縁帯の形状はバラエティーに富む。

a類(67・68・70)では、縁帯下方に稜が入るもの(67・68)と、縁帯下方が体部に対して垂直方向に延びるもの(70)がある。b類(69・73)では、縁帯下方が摘み出され先端が尖るもの(69)と、縁帯下方が丸みを持つもの(73)がある。c類(71・72)では、71は縁帯下方に稜が入るもの(71)と、底部に対してほぼ垂直方向に縁帯が形成されるもの(72)がある。

擂鉢は、いずれも縁帯周辺が回転ナデ調整される。外面には鋸歯が施され、光沢がほとんどない不透明で、薄茶色から濃い紫色の発色である。礫を含むやや密な胎土で、淡黄色を呈するものが主体である。なお70のみ緻密な胎土が使用され、破断面は灰色を呈する。

(片山尚樹)

5. その他

その他の器種として香炉・灯明皿・徳利などがある。

(1) 香炉 (14・15)

14は器高7.5cm、口径6.1cm、高台径4.8cm、15は器高6.0cm、口径7.4cm、高台径6.0cmである。いずれも高台内が直線的に削り込まれた内反高台で、体部下端の丸みは強く、体部はほぼ垂直に立ち上がり筒形になる。14は口縁端部を内側に挽き出しているが、15はそうすることなく口縁端部は角張っている。底部内面中央から内外面にかけてロクロ目がはっきりと確認できる。いずれも底部周辺を除き灰釉が施され、半透明で光沢のある黄緑色を呈しており、黄瀬戸製品と同様の発色である。緻密な胎土が使用され破断面は灰白色である。なお、15には体部下端に輪ドチが付着しており、2次的な使用が想定される。

(宮田実歩)

(2) 灯明皿 (42)

器高2.1cm、口径9.6cm、底径5.4cmと法量的には小皿類の範疇に含められるが、糸切り痕未調整の平底で、体部外面の回転ヘラ削り調整は認められない。口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテの押圧による3条の凸線が同心円状に巡る。釉薬は施されていない。鉄分の多い緻密な胎土が使用され、器表面は焦げ茶色から暗めの朱色で艶があり、破断面は黒色を呈している。

(森秀人)

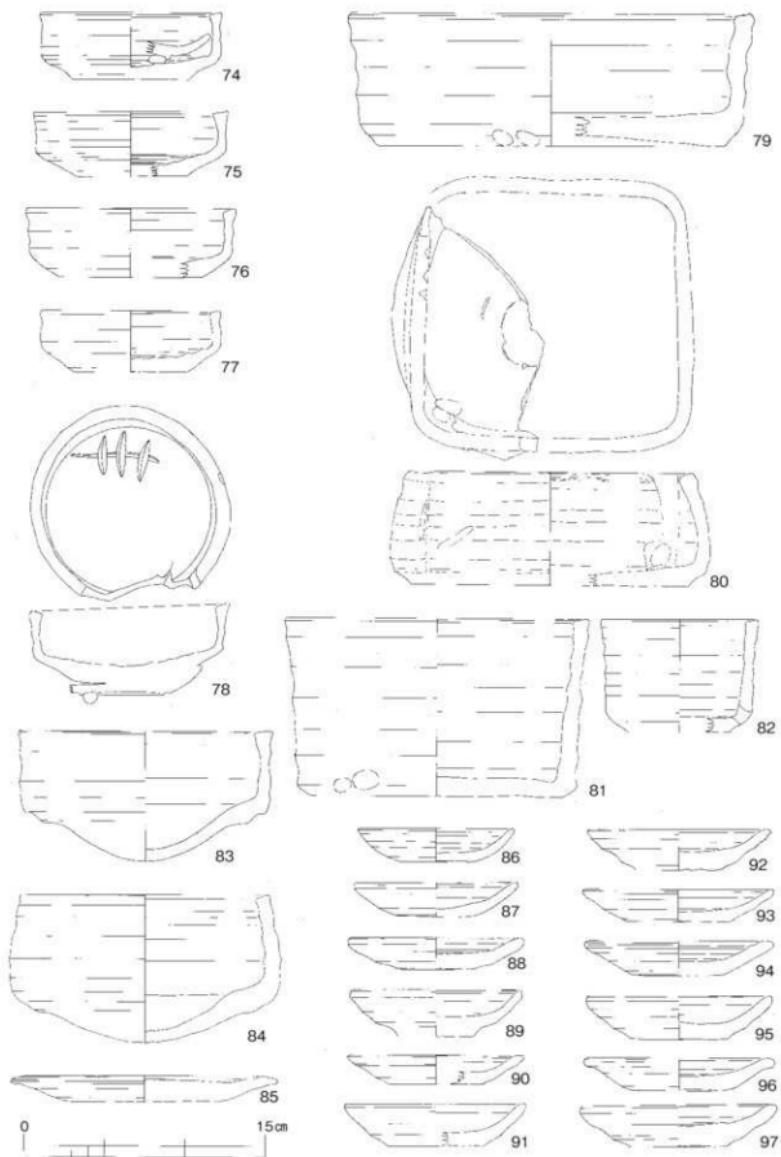
6. 窯道具類

上記の製品の焼成用に用いられた窯道具類には匣鉢・匣鉢蓋・ハサミ皿などがある。6トレンチからは大量に出土しているが、図化した資料は極めて少ない。

(1) 匣鉢 (74~84)

匣鉢は底部の形状から平底匣鉢と丸底匣鉢とに大別される。

平底匣鉢は糸切り痕未調整の平底で、法量によりA類・B類・その他に分類できる。A類(81)は器高11.0cm、口径18.6cm、底径15.5cmとやや大形であるが、最も多く出土している一般的な形状の匣鉢



第9図 第1次調査6トレンチ出土遺物 (3)

である。体部下端に稜があり上方はほぼ直立する。体部内外面のロクロ目は強いが、底部内面はコテの押圧により平滑に仕上げられている。

B類（74～78）は器高4.5cm、口径12cm、底径7.5cm前後。糸切り痕未調整の平底で、体部下方はほぼ直線的に開き、上方は直立する。体部内外面から底部内面にかけて強いロクロ目が認められる。74・75には丸皿Cの破片が付着しており、B類は輪ドチを敷いて丸皿を単独で焼成したものと考えられる。なお74・78の底部内面には、ヘラ状工具により「++」の窯印が彫られている。

その他（79・80・82）に、79は器高8.1cm、口径24.4cm、底径21.1cm、平底匣鉢の中では大型の部類に含まれる。底部内部にはヘラ状工具により「オ」の窯印が確認できる。80は器高7.0cm、口径17.2cm、底径17.0cm。ロクロ成形後、四方を内側から押し広げ方形にしている。底部内面には向付と思われる志野製品が付着している。82は器高6.9cm、口径9.6cm、底径6.3cm。体部下端には直径8cm程の焼成前の穿孔が認められる。いずれも体部内外面のロクロ目は強いが、79・80の底部内面はコテの押圧により平滑に仕上げられるが、82には底部内面までロクロ目が認められる。

丸底匣鉢（83・84）は、器高8.5cm、口径15.5cm、底径13.5cm前後、おそらくコテの押圧により底部が丸く突出させたもので、底部外面には糸切り痕が残り、体部内外面のロクロ目は顕著である。なお84には底部外面に掌の痕跡が残る。平底匣鉢と同様、鉄分の噴き出しと思われる黒斑や疊が含まれるやや粗めの胎土が使用される。内部には天目茶碗の破片が付着しており、輪ドチを敷いて天目茶碗を単独で焼成したものと考えられる。
(加藤友也)

(2) 匣鉢蓋（41・85・88～97）

国化したものは糸切り痕未調整の平底で、口径15cm程度のA類と口径11cm程度のB類とに大別される。

A類（85）は器高1.6cm、口径14.6cm、底径9.0cm、体部は扁平で口縁端部は薄く仕上げられる。体部外面にはロクロ目が残り、口縁部内外面は回転ナデ調整されるが、外面に自然釉やボロが付着するため、内面の調整は不明である。粒子の細かい緻密な胎土が使用される。

B類（41・88～97）は、形状によりa類・b類、その他に分類した。a類（90～92・95・96）は器高2.3cm、口径10.6cm、底径5.6cm前後。体部はほぼ直線的に開き、器厚は全体的に厚い。b類（41・88・94・97）は器高2.1cm、口径10.7cm、底径5.4cm前後。形状はa類に類似するが、底部内面はコテの押圧により同心円状の段や凸線が形成される。その他、89は器高2.9cm、口径10.4cm、底径4.6cm、底部が突出し体部は全体にやや丸みを帯びる。93は器高2.0cm、口径11.2cm、底径6.3cm、高台径がやや広く体部は直線的に開き、器厚は全体的に薄い。

匣鉢蓋B類は、体部外面にロクロ目を残し、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧される。鉄分の噴き出しと思われる黒斑や疊が含まれるやや粗めの胎土が使用される。なお、胎土や法量から平底匣鉢B類に被るものと考えたが、底部内面に輪ドチの痕跡が認められるものが多いことからハサミ皿である可能性もある。

(3) ハサミ皿（86・87）

器高2.1cm、口径9.8cm、底径9.0cm前後。匣鉢蓋B類と同様、糸切り痕未調整の平底で、体部が全体にやや丸みを持って開き、口縁端部は丸く収まる。平底で器厚が薄く、底部内面に輪ドチの痕跡が認められる。緻密な胎土が使用され、焼成による重みが大きいのが特徴である。
(日比野将之)

第2節 第2次調査1グリッド

A 遺構の概要

1. グリッドの設定

第2次調査の1グリッドは豊蔵氏の窯の南東側に確認される平坦面に設定された調査区である（第10図）。第1次調査の西側に南北6.0m、東西15mのグリッドを設定し、調査を行ったところ、北側に平坦面が確認されたため北側のみ東に拡張を行った。拡張部は東に1.7m、南北4.0mを新たに設定し、調査を行ったところ SD01・SK01・SP01が検出され、さらに南東に急な傾斜及び横倒しにされた粘土円柱が確認された。また、SK01の土層断面を確認するため南北3.7m、東西0.2mのサブトレンチを入れた。

2. 土層断面図

1グリッドの土層断面図は6面提示した。A点の標高は205.380m、B点は205.550m、C点は205.740m、D点は206.210m、E点の205.890m、F点は206.030m、G点は205.660mである。土層は①～⑫層が確認された。全ての層において最上層は①黒褐色土が堆積している。拡張部の東壁は北側に②暗赤褐色土が、中央では③褐色土が堆積しており、北側では②層の下に③層がみられる。さらにその下層には④褐色土が堆積している。南側では⑤明褐色土が堆積をみせるのみである。西壁は北側に⑦暗赤褐色土が薄く堆積し、下層に④層と焼土面である⑩暗赤褐色土が僅かに確認される。中央では③層の上に⑪明褐色土が堆積をみせ、⑨褐色土と⑥赤褐色土が⑪層に混じって堆積している。拡張前の東壁では、北側に②④層の順で堆積をみせ、南側では③層が堆積し、その下層に地山である⑥赤褐色土が確認される。また、中央では①層と③層の間に⑧褐色土がレンズ状に入り込んでいる。北壁は西側に⑦暗赤褐色土が、それをやや覆うように東側では②層が堆積している。下層には④層がみられ、西側にはさらに⑩層がある。拡張前南壁及び拡張部南壁では①⑥層の順に堆積が確認される。

3. 検出された遺構

1グリッドでは南側の堆積層は薄く地山まで約0.6mであった。南側では特に遺構は検出されず、礫や根が地山に多く見られることから、平坦面は北側のみに作られていたと思われる。SD01はその北側の平坦面を北東から南西に横断する形で確認された。幅は上端が25～50cmで、下端が10～25cmで、北東から南西へ約3.3m伸びた溝で、溝の中には⑬黄褐色土が堆積しており、礫や遺物も含んでいた。

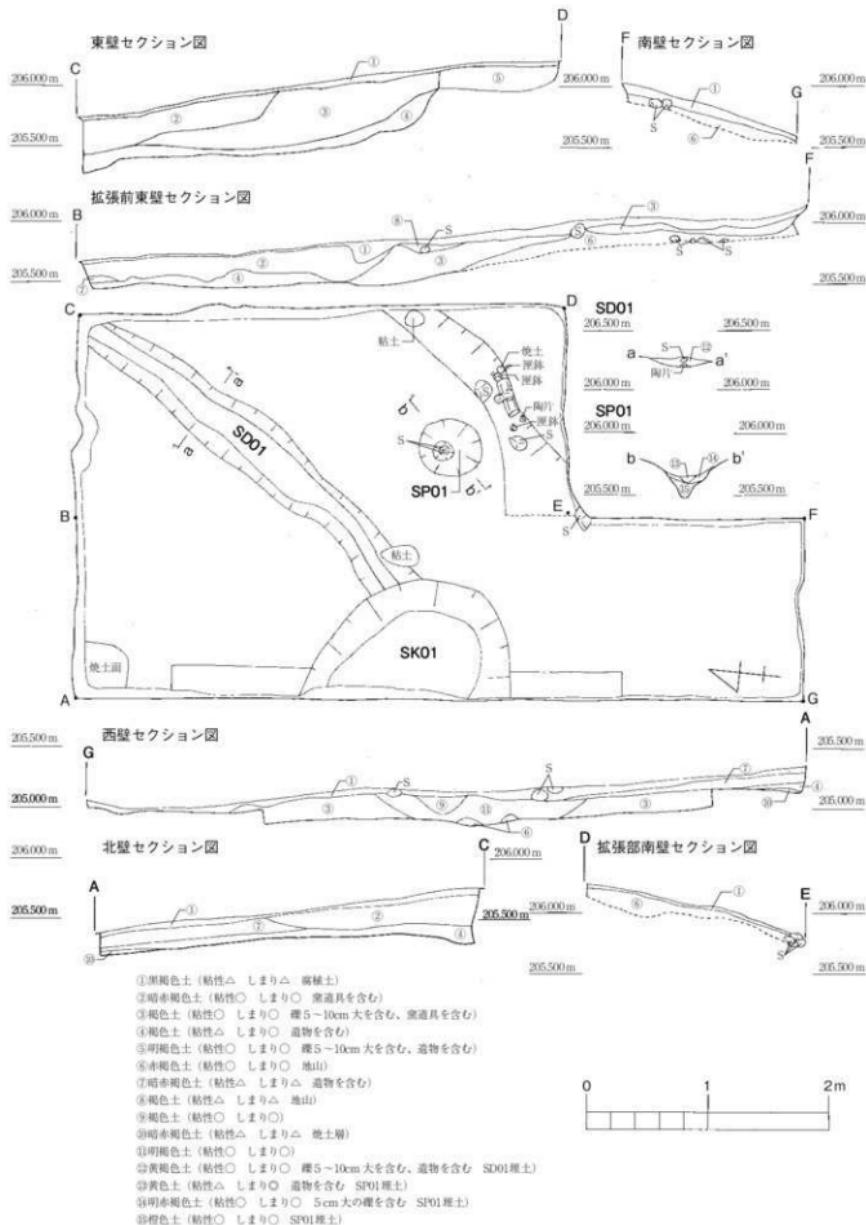
SD01の伸びた南西側には南北1.8m、東西0.9mのSK01が検出された。SK01は西端に位置しており、西は崖になっていることから、盛土をした痕跡である可能性が推測される。

拡張部の南東端では強い傾斜が確認され、その上部に平坦面がみられる。上部の平坦面と傾斜の境からは横倒しとなった粘土円柱及び窯道具が検出された。そのすぐ北西側では、南北50cm、東西47cm、深さ18cmの円形をSP01が確認された。先がすぼまるようにSP01は検出され、中央で段が付いて地上へと広がる。上層では⑭明赤褐色土に、中央に⑮黄色土が入り込むように堆積しており、下層では⑯橙色土が堆積している。

（加藤友也・宮田実歩・上田悠太）

B 出土遺物の概要

第2次調査1グリッドから出土した大窯製品は、碗類39個体、小皿類45個体、中皿・向付類35個体、調理鉢類1個体、その他9個体、計129個体である（表1）。



第10図 第2次調査1グリッド遺構図

1. 碗類

碗類には天目茶碗・筒形碗・小碗をはじめ、図化していないが志野茶碗・丸碗・小天目がある。

(1) 天目茶碗（1～8）

天目茶碗は第1次調査の分類とは異なるが、a～cの3類に分類した。体部下方から丸みを持って立ち上がり、底部から体部にかけて回転ヘラ削り調整を施している。

a類（1～3・5）は器高5.7cm、口径11.6cm、高台径4.7cm前後、高台脇に段が形成され、体部はほぼ直線的に開き、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。高台を残すものは削り出し輪高台で、断面形は外側が内傾、内側が低く僅かに外傾するもの（3）と、外側がほぼ直立し、内側が深く削り込まれ外傾するもの（5）がある。

b類（4・6・8）は器高5.7cm、口径12.2cm、高台径4.8cm前後、削り出し輪高台で、断面形は外側が僅かに内傾、内側は低く僅かに外傾する。体部は僅かに丸みを持って立ち上がり、口縁部は直立する。口縁端部が薄く仕上げられるもの（4・6）と、端部が膨らむもの（8）がある。

c類（8）は志野製品である。器高5.4cm、口径13.0cm、高台径4.6cm、削り出し輪高台で、高台の断面形は外側がほぼ直立し、内側が深く削り込まれ外傾する。高台脇に段が形成され、扁平な体部はやや丸みを持って開き、口縁端部は外反し玉縁状になる。

いずれも体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、体部内面から底部内面にかけてコテが押圧されたものと思われる。高台周辺を除きa・b類には鉄軸、c類には長石軸が施され、前者は茶褐色から黒褐色、後者は乳白色の発色である。いずれも不透明で光沢がある。なお、1には体部下方に薄い鉄軸が施され、さらに鉄軸下に灰軸が認められる。2～8は高台周辺が露胎である。粒子の細かい密な胎土で、破断面は灰白色から淡黄色を呈する。 (佐藤美鈴)

(2) 筒形碗（9～22）

筒形碗は半筒形のA類と切立形B類に大別できる。

A類（9）は高台径5.2cm、高台の断面形は外側が僅かに内傾、内側が緩やかに外傾した付高台である。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整されるが、高台外側の付け根にも回転ヘラ削り痕が認められる。底部内面に「茶溜り」はみられない。体部上方から内面にかけて鉄軸が施されており、光沢がない不透明で黒色の発色である。胎土は長石粒を含むやや粗めのものが使用され、破断面は灰色を呈する。

B類（17～22）は高台脇がほぼ水平方向に開き、体部はほぼ直立する。17は高台径5.4cm、高台の断面形は長方形である。底部内面には茶溜りが形成される。高台周辺は回転ヘラ削り調整されるが付高台である可能性が高い。18は高台径7.0cm、高台の形状は17と同様長方形であるが、茶溜りはみられない。体部下方と高台端部はロクロ非回転のヘラ削り調整、高台内外側と底部外面は回転ヘラ削り調整される。付高台か削り出し輪高台か判断できない。19は高台径4.0cmと狭い。高台外側から高台脇は回転ヘラ削り、体部下端はロクロ非回転のヘラ削り調整、高台端部は回転ナデ調整される。付高台と思われる。体部内外面にはロクロ目が残り、底部中央には浅い茶溜りが形成される。20は体部下端に稜が入り上方が直立する。高台脇から体部下端にかけてロクロ非回転のヘラ削り調整、体部下方には縦方向のヘラ削り調整され、体部上方および内面にはロクロ目が残り、底部中央には浅い茶溜りが形成される。21は残存高5.0cm、口径14.5cmと浅い形状で、体部下端に稜が入り上方が直立する。高台脇から体部下方、および口縁端部にはロクロ非回転のヘラ削り調整され、体部内外面にはロクロ目が残り、底部中央には

浅い茶溜りが形成される。22は高台径5.8cm、断面形が逆台形の付高台で、体部下端は丸みを帯び、上方の器厚は徐々に薄くなる。高台脇から高台外側、高台内側から底部内面には回転ヘラ削り調整、体部下端辺りと高台端部はロクロ非回転のヘラ削り調整される。体部内面にはロクロ目が残り、底部中央には茶溜りが形成されるが、体部外面の調整は不明である。20には窯から引き出した際に付いたと思われる銹み痕が体部下端に認められる。なお18・21・22には底部内面にボロが付着している。

その他（10～16）は、体部上方から口縁部にかけての破片である。口縁部の断面形状は、外反するものの（15・16）、角張るもの（10・12・14）、薄く仕上げられるもの（11・13）などバラエティーに富むが、いずれも口縁端部はロクロ非回転のヘラ削り調整されており、14と15は実に同一個体である。体部下方は、10・12・16には縱方向のヘラ削り調整され、11・13にはロクロ目が残る。14・15は釉薬が厚く掛かり不明である。いずれも体部内面のロクロ目は明瞭である。12には体部内面にボロが付着している。B類の範疇に含められる。

筒形碗B類は、体部下端から内面にかけて鉄軸が施されており、焼成良好なものは光沢があり不透明で黒色の発色である。長石粒を含むやや粗目の胎土が使用され、破断面は灰白色を呈するものが主体である。
(鈴木愛実)

（3）小碗（23～26）

23は器高2.4cm、口径6.2cm、高台径28cm、高台は外側が深く、内側が浅く削り込まれ、高台脇の段は狭い。体部は全体に丸みを帯びる。24は器高2.8cm、口径5.3cm、高台径29cm、高台は内外側とも深く削り込まれる。体部下方に丸みは強く、上方はほぼ直立する。器厚は全体に厚い。25は器高2.3cm、口径5.7cm、高台径2.4cm、高台の幅が広く、内側の削り込みは浅い。高台脇に段は形成されず、体部は全体にやや丸みを持って開く。26は器高2.0cm、口径6.2cm、高台径3.5cm、高台は内外側とも浅く削り込まれる。体部は扁平で器厚は全体に薄い。

いずれも体部中央付近から底部にかけてヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。高台周辺を除き灰軸が施され、焼成が良好なものは光沢があり透明性が強い淡緑色から淡黄色の発色である。粒子の細かい胎土で、破断面は灰白色から乳白色を呈する。
(高野夏姫)

2. 小皿類

小皿類には丸皿・内禿皿・折縁皿に加え、志野丸皿が出土している。

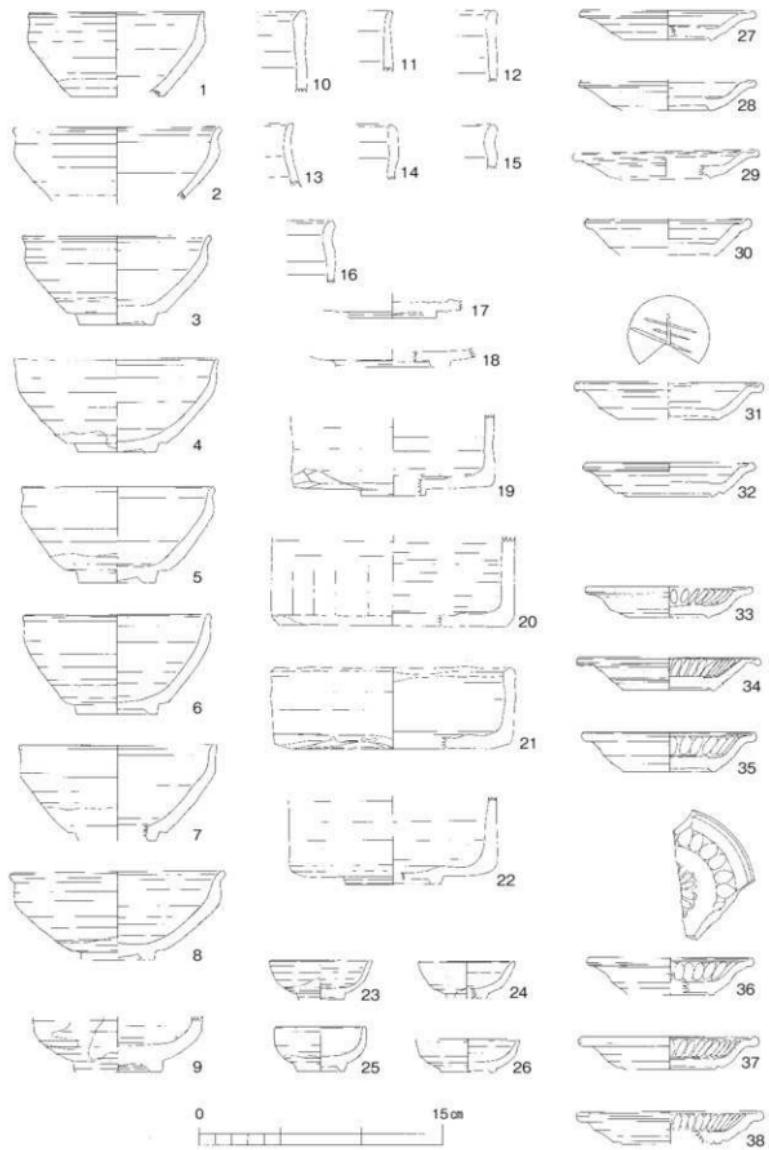
（1）丸皿（41～49）

丸皿は高台の調整手法により付高台のA類、削り込み高台のB類、削り出し輪高台のC類がある。

A類（49）は器高2.0cm、口径10.4cm、高台径5.8cm、高台の断面形は先端が尖る付高台で、体部は僅かに丸みを持って開く。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺および口縁部内外面は回転ナデ調整される。施釉後焼成前に、底部内外面にはヘラ状工具により釉薬を掻き取ることによる、「++」の窯印が認められる。

B類（41～43）は器高1.9cm、口径9.9cm、高台径5.0cm、高台の先端が尖るもの（41・42）と高台の幅が広いもの（43）がある。いずれも体部は僅かに丸みを持って開く。なお、42は口縁部が僅かに外反し、端部は薄く仕上げられる。

C類（44～48）は器高1.9cm、口径9.6cm、高台径5.0cm。高台の断面形は逆台形で、体部は僅かに丸みを持って開くものが多い。B類・C類とも体部中央付近から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部



第11図 第2次調査1グリッド出土遺物 (1)

内外面に回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたと思われる。

丸皿は全面に灰釉が施され、焼成が良好なものは光沢がある透明度が強く淡緑色から黄緑色の発色である。粒子の細かい胎土で、破断面は灰白色から黄白色を呈する。底部外面に輪ドチの痕跡を残すものが多い。

(2) 内禿皿 (50・51)

内禿皿は削り込み高台のB類で、器高1.9cm、口径9.6cm、高台径5.2cm前後、高台の先端は尖り気味で、体部は僅かに丸みを持って開き、口縁端部は丸く収められる。丸皿B類と同様、体部外面から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面には回転ナデ調整されるが、底部内面にはコテの押圧により円形の凸部が形成される。全面に灰釉が施されるが、底部内面凸部の釉薬は拭い取られる。釉調や胎土の特徴は丸皿と同様である。底部外面には輪ドチが付着している。
(佐藤美鈴)

(3) 折縁皿 (27~40)

折縁皿はソギのないI類とソギのあるII類に大別できる。

折縁皿I類 (27~32) は、削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類に分類できる。B類 (27~31) は器高20cm、口径10.7cm、高台径5.8cm前後。高台の先端が尖り気味で体部下端に稜が入るもの (27~29・31) と、高台の幅が広く体部が直線的に開くもの (30) がある。前者は器厚が全体に薄く、口縁端部が立ち上がり、後者は器厚が全体に厚く、口縁端部は丸く収まる。31の底部内面には、串状工具で釉を搔き取ることによる「++」の窓印が認められる。C類 (32) は器高2.1cm、口径10.0cm、高台径5.3cm。高台の断面形が逆台形で、体部はほぼ直線的に開き、口縁部はやや上方に挽き延ばされ端部は丸く収まる。

折縁皿II類 (33~40) も削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類に分類できる。B類 (33~36) は器高22cm、口径10.4cm、高台径5.4cm前後。I類と同様、体部下端に稜が入るもの (33・35・36) と、体部が直線的に開くもの (34) がある。なお、34には体部外面下方に2条の沈線が巡り、35・36に体部内面のソギの数は少なく、36には底部内面に菊花の印花文がみられる。C類 (37~40) は器高2.1cm、口径10.9cm、高台径5.8cm前後。高台の断面形は逆台形で、体部はほぼ直線的に開く。口縁部は水平方向に挽き延ばされ、端部は玉縁状に仕上げられる。39・40には底部内面に菊花文等の印花文が施される。

折縁皿は、体部中央付近から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整される。底部内面に印花文が認められる36・39・40を除くと、コテの押圧による凸部が形成される。全面に灰釉が施され、焼成が良好なものは光沢があり透明性が強い淡緑色から黄緑色に発色するものが主体である。粒子が細かい密な胎土で、破断面は灰白色から淡黄色を呈する。底部内面に凸部が形成されるものは、その部分の釉薬が拭い取られており、底部内外面に輪ドチの痕跡を残すものが多い。
(堀内有)

(4) 志野丸皿 (54)

志野丸皿は器高1.8cm、口径7.4cm、高台径4.2cmと小形である。高台の断面形は先端が尖った逆三角形で、付高台の可能性がある。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部も丸く収まる。体部外面は回転ヘラ削り調整され、口縁端部は回転ナデ調整が施される。全面に長石釉が施される。器表面は不透明で光沢のある白色、破断面は白色を呈する。胎土は密なものを使用している。

3. 中皿・向付類

中皿・向付類には灰志野中皿・志野中皿・志野向付などがある。

(1) 灰志野中皿 (52・53)

52は器高3.0cm、口径12.5cm、高台径6.4cm。高台の先端が尖り、体部は全体に丸みを持って立ち上がり、口縁端部は薄く仕上げられる。器厚は全体に非常に浅い。53は器高3.4cm、口径14.2cm、高台径8.0cm。高台の断面形が先端に丸味を帯びた逆三角形を呈し、体部の形状は52に類似するが、器厚は全体に厚い。

いずれも付高台で、体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺および口縁部内外面には回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。52には全面に、53は底部外面を除き灰志野釉が施され、光沢があるが半透明で淡緑色の発色である。緻密な胎土で、破断面は灰白色あるいは淡黄白色を呈する。なお、52には底部外面に円錐ピンの痕跡が3方に残っており、他の溶着資料から志野中皿の最上位で重ね焼かれている（写真A）。

(2) 志野中皿 (55~61)

志野中皿は形状からa~cの3類に分類した。a類（55~59）は器高3.2cm、口径13.9cm、高台径7.4cm前後。高台の断面形が先端の尖った逆三角形を呈するもの（55・57~59）と、高台の先端に丸みを持つもの（56）がある。体部はいずれも全体に丸みを持って立ち上がるが、57~59は器厚が全体に非常に薄い。b類（60）は器高3.3cm、口径12.7cm、高台径6.6cm、高台端部に丸みを持ち、体部中央の丸みも強いが、口縁部は緩やかに外反する。c類（61）は器高2.4cm、口径11.1cm、高台径5.9cm、高台端部に丸みを持ち、体部が直線的に開き、口縁端部はつまみ上げられる。

志野中皿は付高台で、体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺および口縁部内外面には回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。全面に長石釉が施され、光沢はあるが不透明で白色から乳白色の発色である。やや密な胎土のものが主体で、破断面は灰白色から黄白色を呈する。a類には底部外面に、b・c類には体部下端に円錐ピンの痕跡が3方に残り、上部には58に同形の志野中皿、60に灰釉丸皿A類、61に灰釉丸皿B類が付着しており、それぞれ重ね焼かれたことが判る。

(3) 志野向付 (63~65)

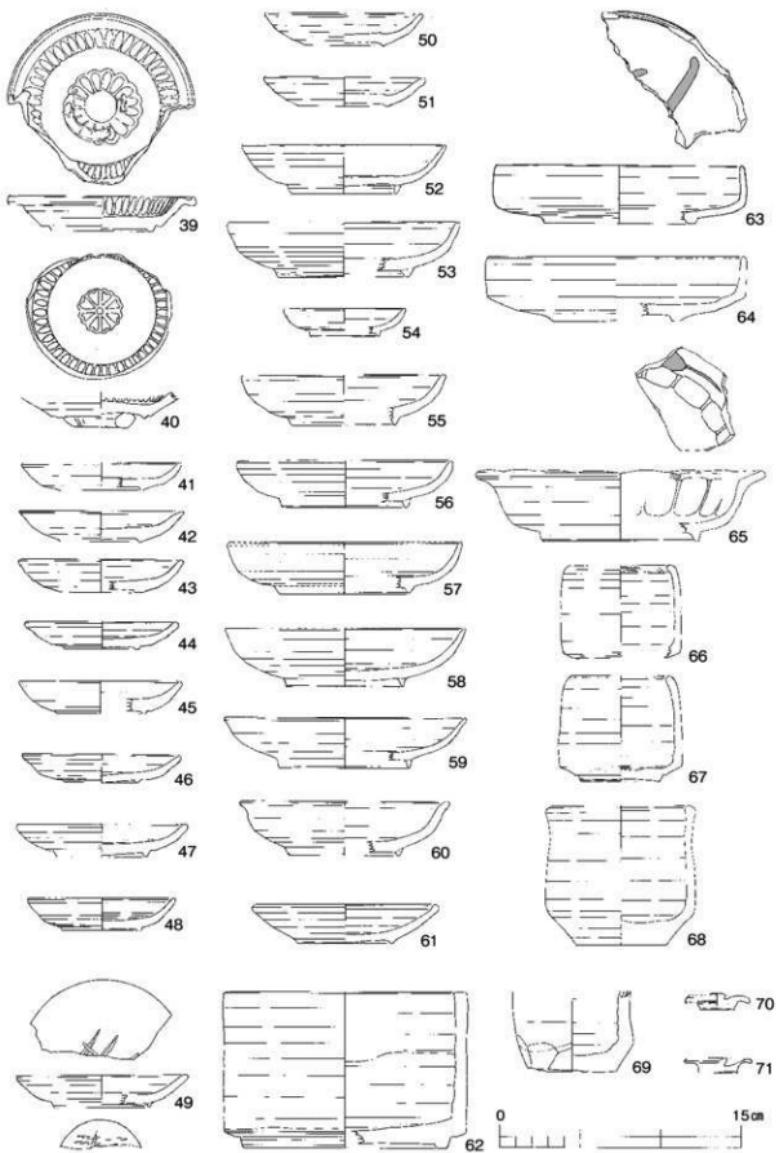
志野向付には浅鉢形（63・64）と皿形態（65）がある。

63は器高3.6cm、口径14.9cm、高台径9.2cm。高台の断面形が逆台形の付高台を有する。体部は下方が直線的に開き、中央が丸みを帯び、上方がほぼ直立する。体部下方は回転ヘラ削り調整、高台周辺および口縁部内外面に回転ナデ調整されるが、釉が厚く施されているため内面の調整は不明である。

64は器高4.0cm、口径15.8cm、高台径7.8cm。高台の幅が広い削り込み高台で、体部の形状は63と類似するが、体部中央が角張り稜が入る。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはロクロ目が残る。

65は器高4.3cm、口径17.4cm、高台径11.6cm。付高台で、高台の断面形は逆三角形で端部に丸みを持つ。体部下方は直線的に開き上方の立ち上がりは強く、口縁部は大きく外折する。高台および口縁部は回転ナデ調整、体部外面は回転ヘラ削り調整が施される。体部内面には丸ノミ状工具によるソギが入ると思われるが、型作りの可能性もある。口縁端部を指で押さえて輪花風に仕上げている。

志野向付は全面に長石釉が施されており、焼成が良好なものは、光沢はあるが不透明で白色の発色である。63の底部内面、65の口縁部上面には鉄絵による文様が施され、いずれも黒色の発色である。やや密な胎土で、破断面は灰白色を呈する。なお63には高台端部に輪ドチが付着している。（鈴木愛実）



第12図 第2次調査1グリッド出土遺物（2）

4. 調理鉢類

調理鉢類では擂鉢のみが出土している。

(1) 擂鉢 (72~81)

擂鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるⅠ類と、口縁部が内側に折り返されるⅡ類とに大別される。いずれも底部は糸切り痕未調整の平底で、体部外面は直線的に開きロクロ目が明瞭である。

擂鉢Ⅰ類 (72~80) には、第1次調査と同様、口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類した。ただし縁帯の形状はバラエティーに富む。a類 (72・75) は、縁帯下方が体部に対して垂直方向に垂れ下がる。72には19本一組の摺目が施される。b類 (73・74・76・77) では、体部下方が膨らみを持つもの (73)、縁帯の幅が狭く外側に丸みを持つもの (74)、縁帯下端が丸みを帯びるもの (76)、縁帯下端がやや角張るもの (77) がある。c類 (78~80) では、縁帯下方に稜が入るもの (78)、口縁端部が外側に挽き出されるもの (79)、縁帯下方が底部に対して垂直方向に垂れ下がるもの (80) がある。

擂鉢Ⅱ類 (81) は、口縁部が内側に折り返され、上面はほぼ平坦である。

擂鉢は、いずれも口縁部内外面は回転ナデ調整され、残部全面に銷軸が施される。光沢がほとんどなく不透明で、薄茶色から濃茶色の発色である。長石粒を含むやや密な胎土で、薄茶色から淡黄色を呈するものが主体である。
(堀内有)

(2) 片口 (62)

片口は器高9.7cm、口径14.8cm、高台径12.5cm。削り出し輪高台で断面形は逆台形を呈し、体部下端に稜があり上方は直立し、口縁端部は角張る。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、体部上方から体部内面にかけてロクロ目、底部内面にはコテが押圧され、口縁部内外面は回転ナデ調整されている。体部外面から体部内面上方にかけて鉄軸が施され、光沢があり不透明で薄茶色の発色である。また体部内面から底部内面にかけて薄い銷軸、高台周辺には濃い銷軸が施され、光沢がなく不透明で茶色の発色である。やや密な胎土が使用され、破断面は薄茶色を呈する。
(鈴木愛実)

5. その他

他の器種では灯明皿・香炉・茶入・徳利・耳付水注などがある。

(1) 灯明皿 (82)

灯明皿は器高2.5cm、口径9.6cm、底径4.8cm。糸切り痕未調整の平底で、体部は全体にやや丸みを持って開く。体部外面にはロクロ目が残り、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテの押圧により、凸線が3段に亘って巡っている。全面に銷軸が施され、光沢がなく不透明で濃い紫色の発色である。密な胎土が使用され、黄白色を呈する。

(2) 香炉 (66~68)

66は底部周辺を欠く。残存高5.7cm、口径6.2cm。体部下端が直線的に開き、上方はほぼ直立し、口縁部は内傾する。体部下端は回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、体部内面のロクロ目は顕著である。体部外面から口縁部内面にかけて灰軸が施され、光沢があるが半透明で黄緑色の発色である。

67は器高6.5cm、口径6.0cm、高台径4.8cm。高台は外側が内傾し、内側が直線的に削り込まれた削り出し内反高台である。高台脇に段が形成され、体部下端が直線的に開き、上方は口縁部にかけて僅かに内傾し、口縁端部は丸く取まる。体部下端から底部にかけて回転ヘラ削り調整され、体部内外面から底

部内面にかけてロクロ目、口縁部内外面は回転ナデ調整されている。底部外面を除き全面に灰釉が施され、光沢があり透明性の強い緑色の発色である。

68は器高8.5cm、口径8.4cm、高台径5.6cm。平底で、体部下方は直線的に開き上方はほぼ直立し、口縁端部は丸く膨らんでいる。調整手法は67と同様で、全面に灰釉が施されるが底部外面の釉は拭い取られている。光沢があり透明性の強い淡緑色の発色である。底部外面には輪ドチの痕跡があり内面にボロが付着していることから、匣鉢蓋の上素焼きにされていたと考えられる。67・68は緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。いずれも底部外面に焼成後の磨減痕が認められる。

(3) 茶入 (69)

平底で、胴部下端は直線的に開き、胴部上方はほぼ直立する。胴部下端はヘラ状工具により削り上げられ、底部外面もフリーハンドによるヘラ削り調整され、糸切り痕が半分以上消えている。胴部上方は回転ナデ調整されるが、内面のロクロ目は顕著である。底部外面周辺を除き鉄釉が施され、焼成不良のため光沢がなく不透明で茶色の発色である。破断面は黄白色を呈する。

(4) 茶入蓋 (70・71)

茶入蓋は器高1.0cm、口径4.1cm、高台径2.2cm前後。高台の断面形は内外側とも直立した低い角高台で、体部は全体に大きく外反する。天井部中央には丸いつまみが貼り付けられる。口縁部直下から底部にかけて回転ヘラ削り調整、天井部上面は回転ナデ調整される。天井部上面には長石釉が施されており、焼成が良好な71は光沢があり半透明で淡白色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は白色を呈する。現代遺物の可能性が高い。

6. 窯道具類

図化した窯道具類には匣鉢・匣鉢蓋・ハサミ皿・焼台がある。

(1) 匣鉢 (87・88)

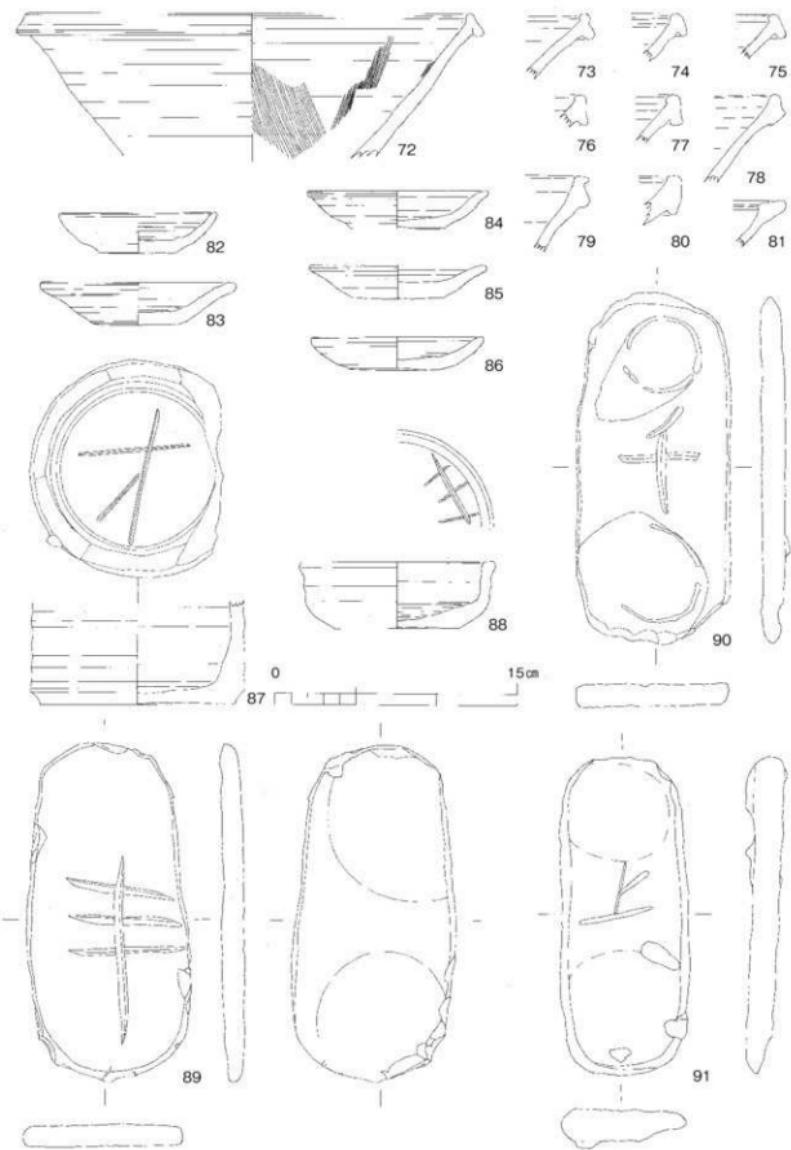
平底匣鉢である。87は残存高6.3cm、底径12.0cm、やや小型であるが第1次調査のA類である。糸切り痕未調整で、体部内外面にはロクロ目が顕著で、底部内面はコテで押圧される。底部内面にはヘラ状工具による「オ」の窯印が認められる。88は器高4.1cm、口径11.8cm、底径7.8cm、第1次調査のB類である。糸切り痕未調整で、体部内外面から底部内面にかけてロクロ目が顕著である。底部内面にはヘラ状工具による「++」の窯印が認められる。また底部内面には灰釉が付着しており、法量からみて灰釉丸皿を1個入れて焼成したものと思われる。

(2) 匣鉢蓋 (83・85・86・89~94)

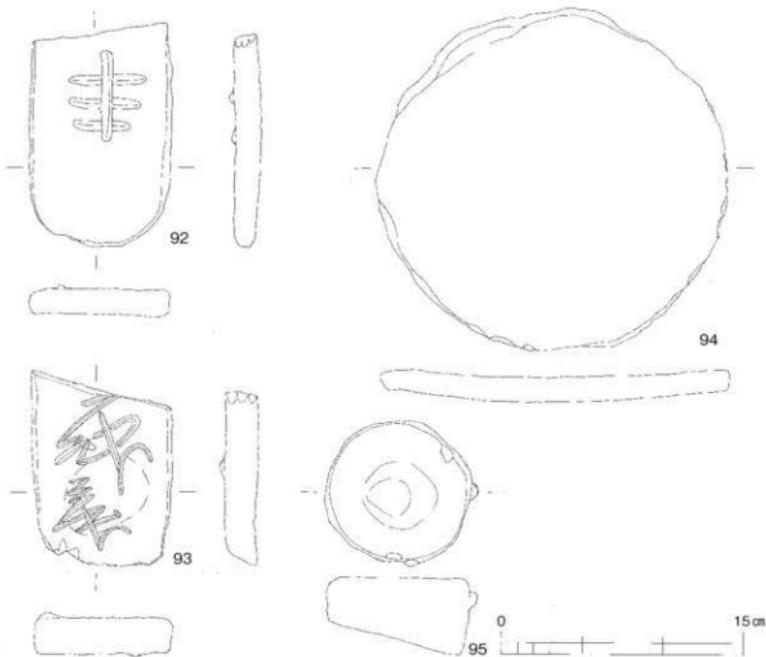
匣鉢蓋にはロクロ成形のI類と手捏ね成形のII類に大別できる。

匣鉢蓋I類 (83・85・86) は器高2.3cm、口径10.6cm、底径5.6cm前後。糸切り痕未調整の平底で、体部外面にはロクロ目が残り、口縁部内外面は回転ナデ調整される。いずれも底部内面にはコテが押圧されており、83には凸線が同心円状に巡り、85・86には円形の凸部が形成される。無釉で、鉄分の噴き出しと思われる黒斑や、礫が含まれる粗悪な胎土が使用される。

匣鉢蓋II類 (89~94) には小判形のA類と円盤形のB類がある。A類 (89~93) は、長径20cm、短径8~10cm程度の楕円形で、厚さは1.5~2.0cm。89・92には「++」、90には「千」、91には「上」などの窯印が認められる。丸ノミ状工具による92以外はヘラ状工具が使用されている。B類 (94) は直径21.5cm程の円形で、厚さ1.5cm。下面には板目状压痕が認められる。無釉で、鉄分の噴き出しと思われる黒斑や、礫が含まれる粗目の胎土が使用される。なお、匣鉢蓋II類には表面に輪ドチの痕跡が認め



第13図 第2次調査1グリッド出土遺物（3）



第14図 第2次調査1グリッド出土遺物（4）

られる。

(3) ハサミ皿 (84)

ハサミ皿は器高2.3cm、口径10.8cm、底径5.8cm。糸切り痕未調整の平底で、体部は僅かに丸みを持って開き、口縁部はやや外反する。体部外面はロクロ目がみられ、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧される。無釉で緻密な胎土が使用され、焼成による歪みが大きい。

(4) 焼台 (95)

焼台とは焼成室床面に水平面を作るために置かれる粘土塊である。1個体のみ図化した。円柱形で手捏ねによる成形である。上面は直径8.5cm、床面の傾斜角度は15度前後となる。上・下面ともヨリ輪の痕跡が認められ、実測図の左側は茶色を呈し、右側には緑色の自然釉が付着している。 (高野夏姫)

第3節 第2次調査2グリッド

A 遺構の概要

1. グリッドの設定

第2次調査の2グリッドは豊蔵氏作業場の北側に面した調査区である（第15図）。南北2.5m、東西7.35mにグリッドを設定し、調査を行った。遺構はSK01・SK02・SK03・SK04・SK05・SX01・粘土土坑が検出された。土坑からは窯道具や陶片が多く出土し、ほとんどが豊蔵氏の作品と推定される。大窯期の遺物は全ての層に含まれるが、出土数は僅かであった。

2. 土層断面図

2グリッドの土層断面図は4面提出した。A点の標高は201.960m、B点は202.420m、C点の標高は202.550m、D点は202.425mである。土層は①～⑩層を確認した。南壁は6層が確認され、①黒褐色土（腐植土）の下に②暗褐色土、さらにその下に③褐色土が堆積するが、中央部は①層の下に荒川豊蔵氏の物原（現代遺物層）が、さらにその下及びその西側には③褐色土を挟んで、また荒川氏の物原がみられ、④褐色土と⑤黄橙色が下に確認される。西側では②層のすぐ下に⑥赤褐色土がみられ、これは地山である。北壁は①②層が確認され、東側では⑧にぶい赤褐色⑨赤褐色土が堆積する。さらに不明土坑が検出され、ここには③層が堆積しており、地山まで達していないものである。西側に③層をやや覆う形で②層の下に⑦明赤褐色土が堆積している。東壁は①②層が堆積し、北側は下に⑩暗赤褐色土③層の順で堆積する。南側には⑩層はみられない。西壁は①②③層の順で堆積している。

3. 検出された遺構

2グリッドは西側の土層の堆積状況は地山まで約8cmと薄く、東に下がるにつれ堆積層が厚くなっている。中央部からSK01・02・03・04及び粘土土坑が検出された。

北側に位置するSK01は縦0.78m、横0.71m、深さ0.2mの円形の土坑である。遺物が出土した土坑の中では最も大きい土坑である。SK01西側に位置するSK02は縦0.59m、横0.57m、深さ0.3mのやや歪んだ円形の土坑である。隣のSK03は縦0.38m、横0.88m、深さ0.37mの半円形の土坑である。トレチの北端にあるため半円形にしか検出できなかつたが、他と同じく円形であると推測される。なお、SK01・SK02の付近からは粘土溜り2ヶ所が確認された。

南側から検出されたSK04は縦0.35m、横0.38m、深さ0.08mの半円形の土坑である。SK03と同じく円形であると推測される。SK05は縦0.43m、横0.94m、深さ0.4mの楕円形の土坑であるSK01・02・03・04・05からは豊蔵氏の作品及び窯道具が多数出土しており、豊蔵氏の作業場に面していることから、豊蔵氏の作品の捨て穴だったと考えられる。

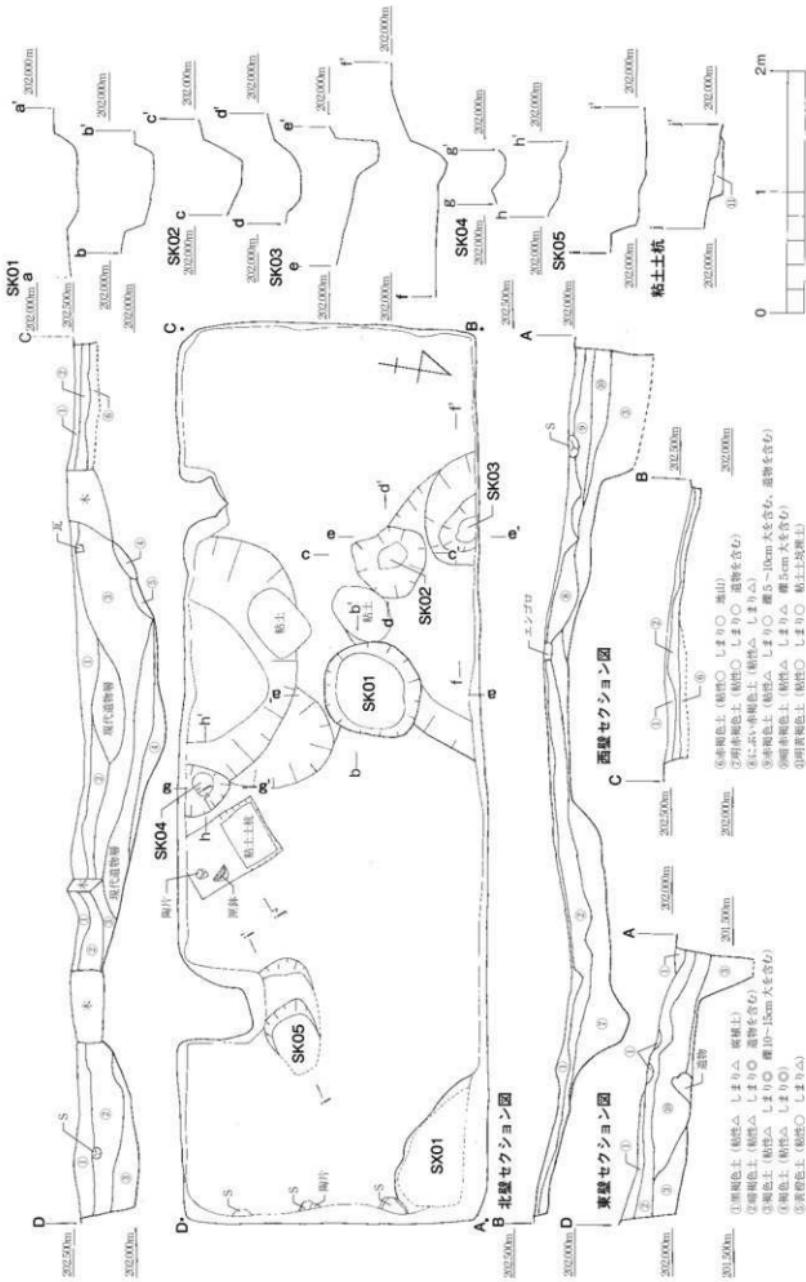
粘土土坑は縦78cm、横52cm、深さは東側で10cm、西側で3cmの四角形で、東側に厚みをもつ。中には⑪明黄褐色が堆積していた。

他に、北東側に不明土坑が確認され、深さ40cmまで掘ったが地山まで到達していない。

（石浜莉那・片山尚樹・三ツ本樹純）

B 出土遺物の概要

第2次調査2グリッドでは、大窯製品は碗類9個体、小皿類27個体、中皿・向付類8個体、調理鉢類7個体、その他4個体、計55個体出土している（表1）。以下、図化したものについてその概要を述



第15図 第2次調査2グリッド遺構図

べる。

1. 碗類

(1) 天目茶碗 (1)

天目茶碗は削り出し内反高台で、器高5.2cm、口径10.7cm、高台径4.6cm。高台の断面形は外側が直立、内側が中央に向かって直線的に浅く削り込まれる。高台脇には段が形成される。体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は折り返され玉縁状になる。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁内外面には回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。高台周辺を除き鉄軸が施され、光沢はあるが半透明で茶褐色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は淡黄色を呈する。

(2) 筒形碗 (2~4)

筒形碗は、高台の形状は不明であるが切立形のB類である。

2は体部の破片である。体部はほぼ直立し口縁端部は角張っている。体部下方は縦方向のヘラ削り調整、口縁端部もヘラ削り調整され波打っているが、体部内面にはロクロ目が残る。残部には鉄軸が施され、光沢はあるが不透明で黒色の発色である。やや密な胎土が使用され、破断面は茶色を呈する。

3・4は底部周辺の破片である。高台脇が水平方向に開き、体部は直立するようである。高台脇は回転ヘラ削り調整、体部下端は非回転のヘラ削り調整(4は縦方向)される。内面にはロクロ目を残し、4にはコテの押圧による茶溢りが形成される。高台脇を除き鉄軸が施され、光沢のない不透明で黒色の発色である。長石粒を含むやや粗い胎土が使用され、破断面が3は灰白色、4は茶色を呈する。

(伊藤真央)

2. 小皿類

(1) 丸皿 (16・17)

丸皿は削り込み高台のB類で、器高1.8cm、口径9.5cm、高台径5.2cm前後。高台の先端は尖り、体部はやや丸みを持って開く。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。全面に灰軸が施され、光沢があり透明性の強い黄緑色から淡緑色の発色である。緻密な胎土が使用され、黄白色から灰白色を呈する。底部外面には輪ドチが付着している。

(2) 折縁皿 (6~15)

折縁皿は、ソギのないI類とソギのあるII類に大別される。

折縁皿I類(13~15)は、削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類とに分類される。B類(13・14)は器高2.2cm、口径10.8cm、高台径6.2cm前後。高台の幅が広く、体部がほぼ直線的に開き扁平なもの(13)と、高台幅が狭く体部中央に稜が入るもの(14)がある。C類(15)は器高2.1cm、口径10.7cm、高台径5.6cm。高台の断面形が逆台形で高台幅が広く、体部下方に稜が入る。

折縁皿II類(6~12)も削り込み高台のB類と削り出し輪高台のC類がある。B類(6~9)は器高2.0cm、口径10.3cm、高台径5.4cm前後。体部が直線的に開きもの(8)と、体部下方に稜が入るもの(6・7・9)がある。なお、9は体部が扁平で口縁端部の膨らみは大きい。C類(10~12)は器高2.1cm、口径10.6cm、高台径5.7cm前後。高台幅が狭く、体部が扁平で口縁端部が玉縁状になるもの(10・11)と、高台幅が広く体部が直線的に開き、口縁端部が内側に折り返されるもの(12)がある。10・11には底部内面に菊花の印花文が認められる。

折縁皿は、体部中央付近から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面に回転ナデ調整され、

10・11・15を除くと、底部内面にコテの押圧により凸部が形成される。全面に灰釉が施されており、焼成良好なものは、光沢があり透明性の強い淡緑色から黄緑色の発色である。胎土は密で、破断面は灰白色から白色を呈する。内面に凸部を有するものは、その部分の釉薬が拭い取られ、輪ドチの痕跡を残すものが多いことから、輪ドチを挟んで同形の折縁皿を重ね焼きしたものと思われる。したがって凸部の無いものは最上位で焼成されたものと思われる。

3. 中皿・向付類

(1) 灰釉中皿類 (18・19)

18は削り出し輪高台で、器高2.1cm、口径13.2cm、高台径7.7cm。高台の断面形は逆台形で、体部は全体に丸みを持って開く。体部内面下方に沈線が一周し、丸ノミ状工具によるソギが入れられる。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、底部内面にはコテの押圧により凸部が形成される。

19は削り出し輪高台で、器高3.0cm、口径13.2cm、高台径7.7cm。高台の断面形は逆台形で、体部に丸みを持ち、口縁部は緩やかに外反する。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、底部内面にはコテの押圧により円形の凸帯が形成される。

いずれも全面に灰釉が施されているが、焼成がやや不良のため、光沢がなく不透明で淡黄褐色の発色である。内面凸部および凸帯の釉薬は拭い取られている。
(森村知幸)

4. 捣鉢・片口

(1) 捣鉢 (25~44)

捣鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるI類が出土している。出土量が少ないため縁帯周辺のみを図化したが、底部は糸切り痕未調整の平底で、体部は直線的に開き外面にはロクロ目が明瞭である。口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類した。ただし縁帯の形状はバラエティーに富む。

a類(26・28)は縁帯下方が体部に対して垂直方向に延びるものである。b類(25・27・29~39)では、縁帯の幅が狭いもの(25)、縁帯下方が挽き出され下端に丸みを持つもの(27・32・33)、縁帯下方が体部に対して垂直方向に延びるもの(29~31)、縁帯下方が挽き出され先端が尖るもの(35・36)、縁帯下端が体部上端と密着するもの(34・37~39)がある。c類(40~44)は縁帯下方が底部に対して垂直方向に延び、体部上端と密着し丸みを持つものである。

捣鉢は、いずれも縁帯周辺が回転ナデ調整される。外面には銷釉が施され、光沢がほとんどなく不透明で、薄茶色から濃い紫色の発色である。長石粒を含むやや密な胎土で、薄茶色から淡黄色を呈するものが主体である。
(藤澤良祐)

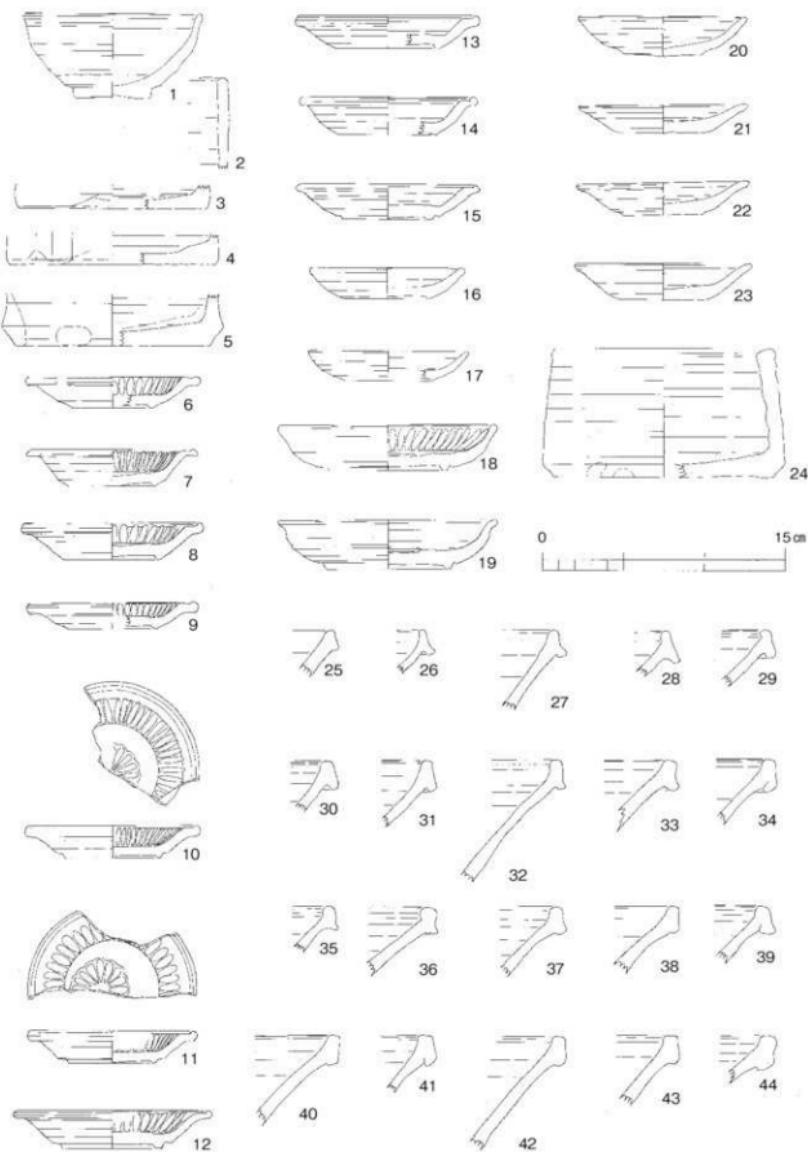
5. その他

(1) 土器皿 (20)

20は器高2.4cm、口径10.1cm、底径4.8cm。糸切り痕未調整の平底で、体部は丸みを持って開き口縁部は丸く收まる。体部外面にはロクロ目、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面はコテにより押圧されている。無釉で焼成はやや不良、全体に薄茶色の発色である。胎土は比較的緻密である。匣鉢蓋やハサミ皿とは形状・胎土が異なるため、土器皿と考えた。
(垣見太郎)

(2) 筒形容器 (5)

5は残存高3.2cm、底径は推定で12.0cm。糸切り痕未調整の平底で、体部下端に稜が入り、上方は直



第16図 第2次調査2グリッド出土遺物

立する。体部内外面にはロクロ目が顕著で、底部内面にはコテが押圧される。体部下端にはロクロから取り上げる際の指痕が残る。形状や調整技法は後述する平底匣鉢に類似するが、体部の片側にのみ鋳軸が施されており、光沢がなく不透明で黒色の発色である。

(伊藤真央)

6. 窯道具類

(1) 平底匣鉢 (24)

平底匣鉢は器高8.0cm、口径13.4cm、底径13.6cm。糸切り痕未調整の平底で、体部下端に稜が入り、上方はほぼ直立する。体部内外面にはロクロ目が顕著で、口縁部内外面は回転ナデ調整され、底部内面にはコテが押圧される。体部下端にはロクロから取り上げる際の指痕が残る。黒斑や螺を含む胎土が使用される。

(2) ハサミ皿 (21~23)

ハサミ皿は器高2.0cm、口径10.3cm、底径5.2cm前後。糸切り痕未調整の平底で、体部はほぼ直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。器厚は底部周辺が厚く、口縁端部に向かうにしたがい薄くなる。体部外面にはロクロ目、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面はコテにより押圧されている。いずれも無軸で、焼成による歪みがみられる。21・22には底部内部に灰軸の小皿類の高台が付着しており、21の口縁部外面には3方に長脚ビンの痕跡が認められる。

(垣見太郎)

第4節 第2次調査3グリッド

A 遺構の概要

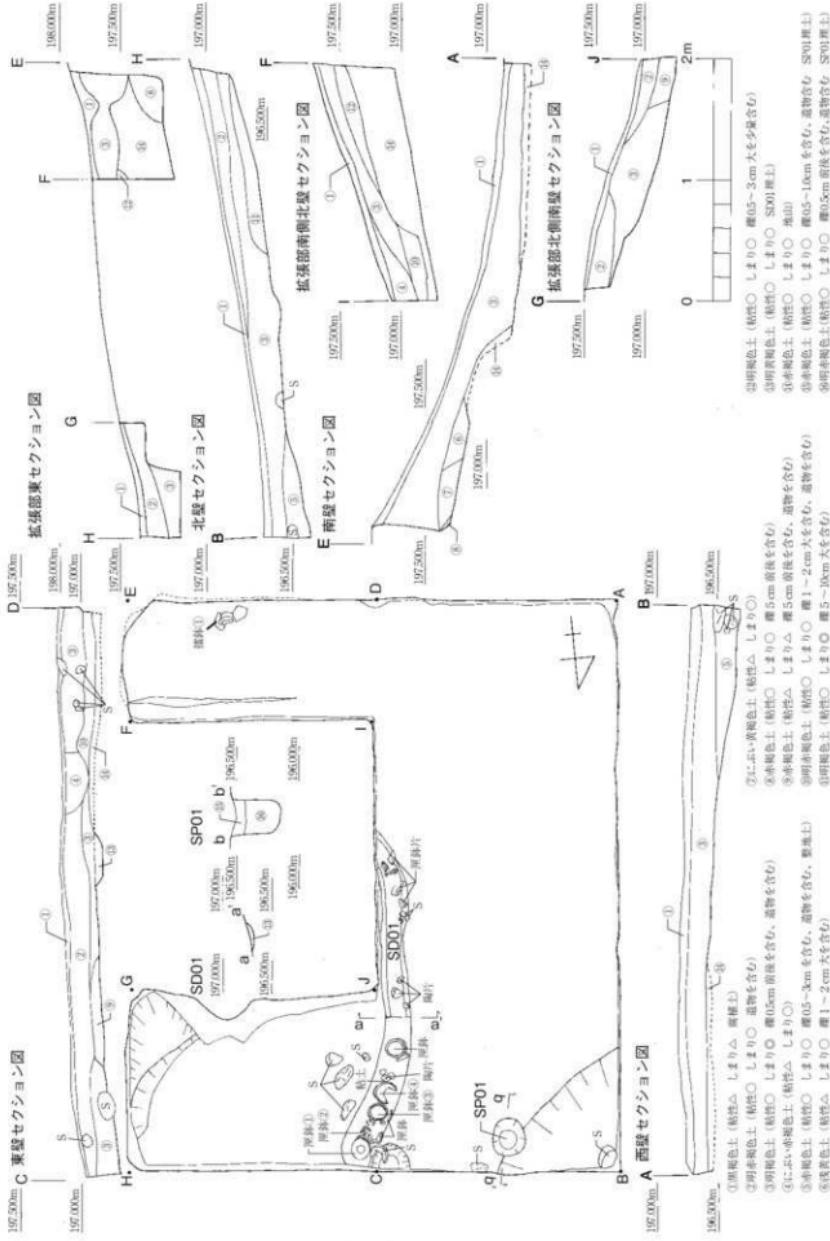
1. グリッドの設定

第2次調査の3グリッドは1号窯の北側に位置する荒川農業資料館南西部の遊歩道の平坦面に設定された調査区である(第17図)。南北に4.6m、東西に2.0mのグリッドを設定し、調査を行ったところ、SD01が検出されたため、東側に拡張を行った。拡張部は中央に木があったため、北側に南北に1.5m、東西に2.0mを、南側に南北1.0m、東西に2.0mを拡張した。拡張部南側の北壁に沿って層位を確認するために南北0.5m、東西約1.4mのサブトレンチを入れた。調査区内では、SD01・SP01が検出され、また北西端に平坦面を作るための盛土が確認された。

2. 土層断面図

3グリッドの土層断面図は7面提示した。A点の標高は196.887m、B点の標高は196.886m、C点は196.910m、D点は197.030m、E点は197.940m、F点は197.720m、G点は197.500m、H点は197.320m、I点は197.090m、J点は197.040mである。土層は①～⑬層が確認された。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。拡張前の東壁は、北側では②明赤褐色土③明褐色土の順で堆積しており、③層に覆われる形で④赤褐色土が僅かに堆積する。南側では③層が堆積し、②層と③層との間に擾乱と思われる⑤にぶい赤褐色土がみられ、さらに下層には⑩明赤褐色土が堆積し、地山である⑪赤褐色土が確認される。⑬明黄褐色土はSD01の埋土であり、粘土である。

西壁は③層が堆積し、南側では⑫層が、北側には⑤赤褐色土が最も深いところで22cmほど堆積している。北壁は②③層の順で堆積しているが、西側には②層は確認されない。③層の下には西側で⑤層、東側で⑪明褐色土が堆積している。南壁は①③層の順で堆積し、西側では⑭層が、東側では⑥浅黄色が⑦にぶい黄褐色を覆うように堆積している。



拡張部東壁の北側では②③層の順で堆積している。南側では①③④層の順に堆積をみせ、さらに⑪⑫赤褐色土が確認される。また、③層と⑪層の下に⑫明褐色土が挟まれている。拡張部南側北壁では③層を覆う形で④層が堆積している。西側には⑭明褐色土が、東側には⑫明褐色土が堆積をみせ、下層に⑬層が確認された。拡張部北側南壁では②③層の順に堆積しており、西側では②層の下に⑨赤褐色土が堆積する。

3. 検出された遺構

3グリッドでは拡張部が斜面になっており、特に南側に強い傾斜がみられる。その斜面と平坦面の境にSD01が確認された。SD01は南北に約2.8m伸びた溝で、幅は上端で約22cm、下端で約13cmである。溝の中には⑯明黄褐色の粘土が堆積しており、さらに匣鉢や輪ドチなどの窯道具が検出された。

また、北西側では地山が下がっているため、上に整地土（⑤層）を載せて平坦面を形成している。平坦面と地山の傾斜との境にSP01は確認された。SP01は縦2.6cm、横3.0cm、深さ40cmの円形のピットである。上層には⑮赤褐色、下層には⑯明赤褐色が堆積しており、柱穴かどうかは不明である。

（森秀人・山本駿・小林万容）

B 出土遺物の概要

第2次調査の3グリッドの大窯製品は碗類11個体、小皿類10個体、中皿・向付類12個体、調理鉢類2個体、その他1個体、計36個体出土している（表1）。

1. 碗類

（1）天目茶碗（1）

天目茶碗は削り出し輪高台で、器高5.8cm、口径11.5cm、高台径4.6cm。高台の断面形は外側が高くやや内傾、内側が低く僅かに外傾し、高台脇には段が形成される。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部は下方が一旦直立するが端部は外反しS字状になる。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁内外面には回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。高台周辺を除き鉄釉が施され、光沢はあるが不透明で黒褐色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は淡黄白色を呈する。

（2）筒形碗（2～4）

筒形碗には半筒形のA類と切立形のB類がある。

B類（2）は体部上方の破片で、口縁部は緩やかに外反する。体部外面には縦方向にヘラ削り調整、口縁端部にはロクロ非回転のヘラ削り調整が施されるが、内面にはロクロ目が残る。残部全面に鉄釉が施され、光沢はあるが不透明で黒色の発色である。やや粗い胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。

A類（3・4）のうち、3は残存高5.0cm、高台径6.6cm。高台の断面形は外側がほぼ直立、内側が外傾した付高台である。直線的に開く体部下方の中央に稜が入り、上方はほぼ直立する。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺は回転ナデ調整される。体部内面にはロクロ目が残り、底部内面にはコテが押圧されたものと思われる。中央が浅く凹んでおり茶溜りが形成される。高台周辺を除き鉄釉が施され、やや光沢はあるが不透明で黒色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。

4は器高8.2cm、口径10.4cm、高台径4.6cm。高台の断面形が逆台形を呈する削り出し輪高台である。体部下方の丸みが強く上方はほぼ直立し、口縁端部は丸く収まる。体部下方から底部にかけて回転ヘラ

削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整されるが、体部内外面にはロクロ目が残る。体部上方から内面にかけて鉄釉が施され、光沢がなく不透明で黄褐色の発色である。現代遺物の可能性が高い。やや粗い胎土を使用され、破断面は黄白色を呈する。内面にはボロが付着しており、匣鉢に入れられずに焼成されたものと思われる。

(伊藤真央)

2. 小皿類

小皿類には丸皿・稜皿・折縁皿がある。

(1) 丸皿（5・6）

丸皿には付高台のA類と削り出し高台のC類がある。

A類（5）は器高1.7cm、口径9.7cm、高台径6.2cm。高台の断面形は逆三角形で先端が尖り、体部は全体に丸みをもって立ち上がる。体部下方から底部にかけて回転ナデ調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、内面にはコテが押圧されたものと思われる。全面に灰釉が施され、光沢があり透明度が強い淡緑色を呈する。緻密な胎土が使用され破断面は白色を呈する。

C類（6）は器高2.2cm、口径10.2cm、高台径5.8cm。断面形が逆台形状を呈する削り出し高台で、体部は僅かに丸みをもって開く。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面には回転ナデ調整、内面はコテにより押圧されている。全面に灰釉が施されるが剥落部が多く、光沢のない黄白色の発色である。底部外面には輪ドチが付着している。

(2) 稜皿（7）

稜皿は削り込み高台で、器高2.6cm、口径9.6cm、高台径5.0cm。高台端部にやや幅を持ち、体部中央に棱が入り、口縁部や緩やかに外反する。体部中央から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面は回転ナデ調整され、底部内面にはコテが押圧により凸部が形成される。全面に鉄釉が施され、光沢があり不透明で黒褐色の発色である。破断面は黄白色を呈する。内面凸部の釉は拭い取られており、体部下方には团子トチが付着している。

(3) 折縁皿（8～11）

折縁皿は体部内面にソギのないI類とソギのあるII類とに大別される。

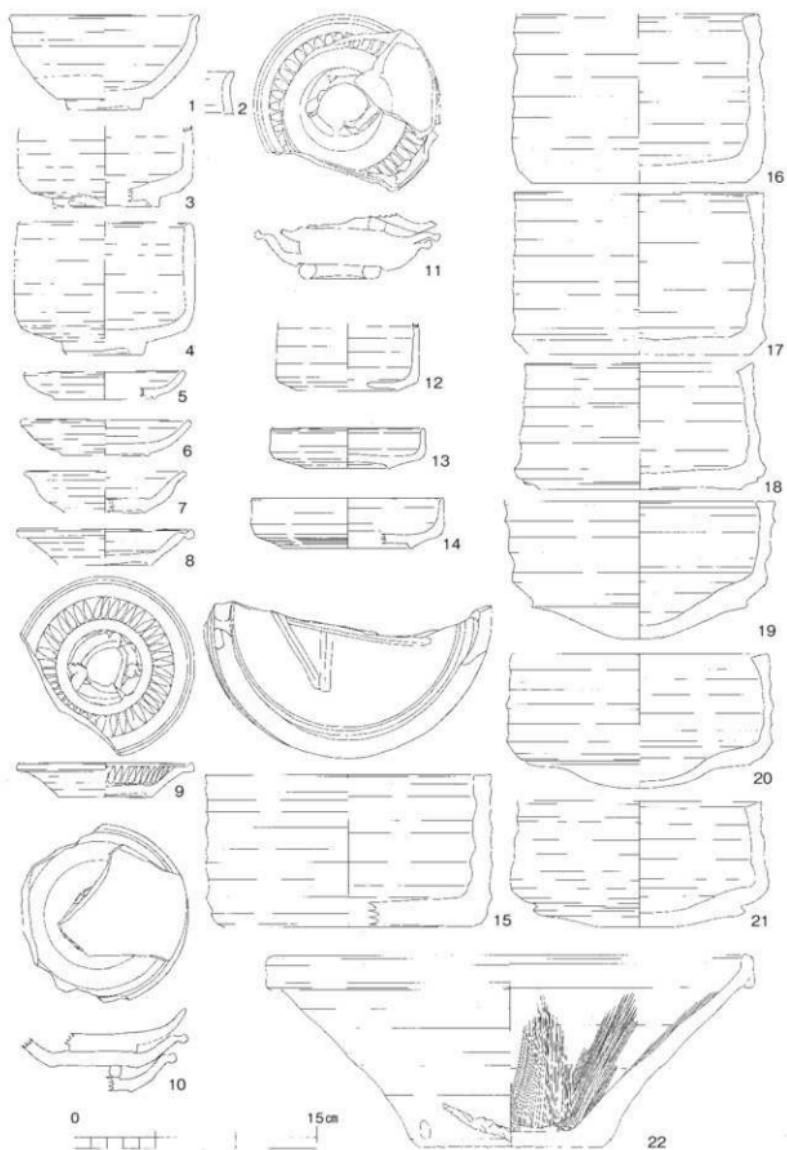
折縁皿I類（8）は削り込み高台のB類で、器高2.2cm、口径10.6cm、高台径5.8cm、折縁皿II類（9）もB類で、器高2.1cm、口径10.6cm、高台径5.8cm。いずれも高台端部に幅を持ち、体部は直線的に開く。口縁部はほぼ水平方向に挽き出され、8は口縁端部が内側に折り返され玉縁状になるが、9は先端が尖り気味に仕上げられる。体部下方から底部に回転ヘラ削り調整、口縁部内外面には回転ナデ調整され、体部内面はコテの押圧により凸部が形成される。全面に灰釉が施され、光沢があり透明性が強い緑色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は白色から黄白色を呈する。底部内面凸部の釉薬は拭い取られ、内外面に輪ドチが付着することから、輪ドチを挟んで重ね焼かれた可能性が高い。

10・11は折縁皿と丸皿の溶着資料である。10には折縁皿I類のB類が2枚重ねられ、一番上に丸皿B類が載る。11には折縁皿II類のB類が3枚重ねられ、一番上に丸皿C類が載る。輪ドチを挟んで重ね焼かれている。なお、これら小皿類には灰釉が全面に施され、光沢があり透明性の強い淡緑色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は淡黄色を呈する。

(半場千晴)

3. 中皿・向付類

中皿・向付類には黄瀬戸向付と志野向付がある。



第18図 第2次調査3グリッド出土遺物

(1) 黄瀬戸向付 (12~14)

黄瀬戸向付は、筒形(12)と浅鉢形(13・14)とに分類できる。12は残存高4.1cm、高台径6.2cm、13は器高2.5cm、口径9.3cm、高台径5.2cm、14は器高3.1cm、口径11.7cm、高台径8.0cm。いずれも削り込み高台で高台端部は尖り、体部下方は直線的に開き上方はほぼ直立する。体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部内外面には回転ナデ調整、内面にはコテが押圧されたものと思われる。全面に灰釉が施され、光沢がなく不透明で黄褐色の発色である。文様は認められない。胎土はやや密で、黄褐色を呈する。なお、12には底部中央に2.4cm程の焼成前の穿孔が認められ、13には体部下端に团子トチの痕跡が3方に残る。

(片岡優歩)

(2) 志野向付 (写真C)

志野向付は細片のため図化できなかったが、いわゆる「平向付」が出土している。底部内面には段が形成され、外面には角柱状の足が付けられている。内面には鉄絵が描かれ黒色に発色し、全面に長石釉が施され、光沢があり半透明で灰白色の発色である。胎土は密で淡黄色を呈する。

(藤澤良祐)

4. 捜鉢

(1) 捜鉢 (22)

捜鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるI類で、器高11.8cm、口径28.9cm、底径11.2cm、内底径7.4cm。糸切り痕未調整の平底で、体部は下端に稜が入るが上方は直線的に開く。底部に対してほぼ垂直方向に縁帯が形成され、口縁端部は丸みを持ち、縁帯下端は体部上端と密着する。体部外面にはロクロ目が明瞭で、縁帯周辺は回転ナデ調整が施される。摺目は17本一組で、底部内面には3方に、体部内面には11方向に引かれている。全面に鉛釉が施され、僅かに光沢はあるが不透明で茶色の発色である。胎土は長石粒を含むが緻密で、破断面は白色から淡黄色を呈する。

体部下端には紐起こし痕や起こす際の指痕が確認できる。また体部下方には4方に团子トチの痕跡、体部下端には摺目が付着することから、同形の捜鉢を重ね焼きしたものと思われる

5. 窯道具類

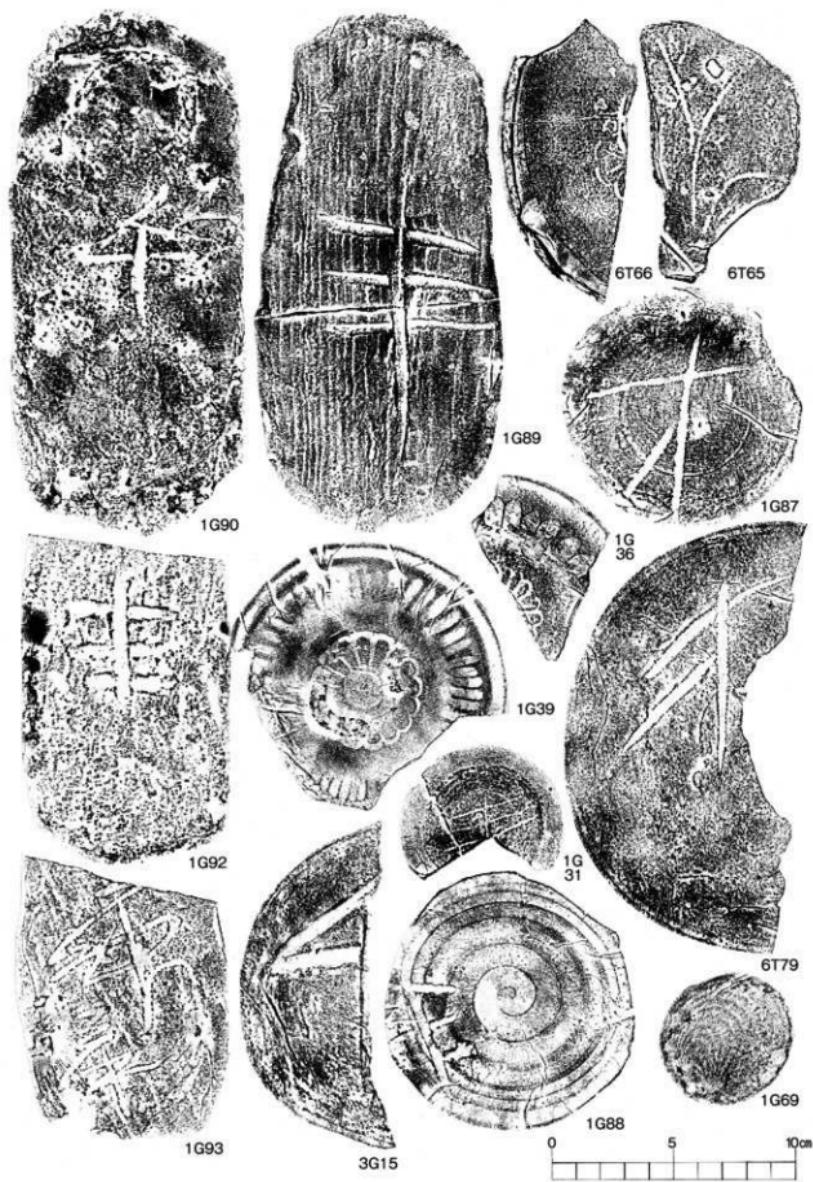
(1) 匣鉢類 (15~21)

匣鉢は底部の形状から平底匣鉢と丸底匣鉢とに大別される。

平底匣鉢(15~18)は器高10.0cm、口径16.0cm、底径14.0cm前後。糸切り痕未調整の平底で、体部下端に稜が入り上方はほぼ直立する。体部内外面のロクロ目は強いが、底部内面はコテの押圧により平滑に仕上げられている。15の底部内面には、ヘラ状工具により「千」の窯印が彫られており、18の底部外面にはヘラの挿入痕が認められる。

丸底匣鉢(19~21)は器高8.0cm、口径16.0cm、底径13.5cm前後。おそらくコテの押圧により底部が丸くと出させたもので、底部外面には糸切り痕が残り、体部内外面のロクロ目は顕著である。なお、19には底部外面に掌の痕が残り、底部内部には輪ドチの痕も確認できる。平底匣鉢と同様、鉄分の噴き出しと思われる黒斑点や疊が含まれるやや粗めの胎土が使用されている。

(日比野将之)



第19図 第1・2次調査拓本

第1表 第1・2次調査大窯製品個体数

大分類	中分類	高台	6トレンチ	1グリッド	2グリッド	3グリッド	小計	総計
碗類	天目茶碗D・F	C	22	21	2	4	49	58
	天目茶碗E	D	4	1	1	2	8	
	志野天目	C	0	1	0	0	1	16
	簡形碗・半筒	A	1	1	0	1	3	
	簡形碗・切立	A	3	6	3	2	13	8
	志野茶碗		0	2	0	0	2	
	灰釉丸碗	C	0	1	0	1	2	12
	鉄釉丸碗	C	3	0	1	0	4	
	灰釉小碗	C	2	4	2	1	9	12
	小天目	C	0	2	0	1	3	
小皿類	小 計		35	39	9	11	94	
	灰釉丸皿	A	4	1	0	0	5	54
	灰釉丸皿	B	7	5	3	1	16	
	灰釉丸皿	C	17	12	3	1	33	
	灰釉内壳皿I	B	3	3	0	0	6	8
	灰釉内壳皿II	B	1	0	0	0	1	
	鉄釉内壳皿I	Bか	1	0	0	0	1	79
	灰釉折縁皿I	B	9	7	3	3	22	
	灰釉折縁皿I	C	10	4	1	0	15	
	灰釉折縁皿II	B	5	7	10	4	26	
中皿・向付類	灰釉折縁皿II	C	4	5	7	0	16	
	鉄釉碟皿B	B	0	0	0	1	1	2
	志野丸皿	AかC	0	1	0	0	1	
	小 計		61	45	27	10	143	
	灰釉中皿		4	2	3	0	9	29
	灰志野中皿	A	0	7	0	0	7	
	志野中皿	A	1	11	1	0	13	
	黄瀬戸向付		4	2	1	10	17	39
	志野向付		10	10	1	1	22	
	鉄釉大皿		1	1	1	1	4	
調理鉢類	黄瀬戸盤		0	1	1	0	2	8
	志野大皿		1	1	0	0	2	
	小 計		21	35	8	12	26	
	鉄釉擂鉢	E	3	1	5	2	11	11
	鉄釉片口		1	0	1	0	2	3
	灰釉片口		0	0	1	0	1	
	小 計		4	1	7	2	14	
その他	鉄釉徳利		1	1	1	1	4	7
	灰釉徳利		1	0	0	0	1	
	志野徳利		1	1	0	0	2	2
	鉄釉耳付水注		0	1	0	0	1	
	鉄釉茶入	E	0	1	0	0	1	8
	灰釉香炉		2	3	1	0	6	
	志野香炉		0	1	1	0	2	4
	無釉灯明皿	E	1	0	0	0	1	
	鉄釉灯明皿	E	1	1	1	0	3	
	小 計		7	9	4	1	21	
総計			128	129	55	36	348	

第2表 第2次調查出土遺物台帳

第3表 第1次調査6トレンチ出土遺物計測表

図	器種	高台 ※1	寸法(cm)			注記 番号	口縁残 存率%	高台残 存率%	種類	輪子の痕跡	備考
			器高	口径	底径						
1	天日茶碗 D	C	5.5	11.2	4.2	No.5	15		鉢		ゆがみ大
2	天日茶碗 D	C	5.6	11.0	4.7	No.5	100		鉢		
3	天日茶碗 D	C	5.6	11.8	4.4	No.5	20	80	鉢		
4	天日茶碗 E	D	5.7	11.4	4.7	No.4	45	70	鉢+鋸		
5	天日茶碗 F	—	(6.0)	13.0		No.5	50		鉢		
6	筒形碗 B	—	(6.1)			No.5			鉢		
7	筒形碗 B	—	(4.5)			No.9			鉢		
8	筒形碗 B	—	(7.1)	11.9	10.6	No.7	10		鉢		
9	筒形碗 B	A	(4.1)			No.18			鉢		
10	筒形碗 B	AかC	(2.0)			No.6			鉢		
11	筒形碗 A	A	(1.4)			No.9			鉢		
12	小碗	C	2.3	5.4	2.5	No.5	25	100	灰	外	
13	小碗	C	2.6	5.8	3.1	No.7			灰		
14	香炉	D	7.5	6.1	4.8	No.4			灰		
15	香炉	D	6.0	7.4	6.0	No.5			灰		体部下端にヨリ輪付着
16	丸皿	A	2.0	9.2	5.4	No.4			灰		
17	匣鉢蓋	E	2.6	10.6	5.4	No.5	80		無		凸部あり
18	丸皿	A	2.1	9.6	5.6	No.5			灰	外	外底に匣鉢付着
19	丸皿	A	2.0	9.4	5.6	No.5	45	45	灰	外	
20	内壳皿 I	B	2.0	10.6	6.7	No.5	30	30	灰		焼成やや不良、凸部輪拭う
21	丸皿	B	1.9	9.8	5.3	No.4	40	35	灰		体部下端に円錐ビン痕
22	丸皿	B	2.0	9.2	5.0	No.41	10	50	灰	外	内底に匣鉢付着
23	丸皿	B	2.15	8.8	4.6	No.6	25	45	灰		体部下端に円錐ビン痕
24	丸皿	B	2.0	9.9	5.8	No.8	45	55	灰か		焼成不良
25	丸皿	B	1.8	10.0	5.5	No.?	30	75	灰	外	焼成やや不良
26	丸皿	C	1.9	9.2	5.7	No.2	20	45	灰	外	窓道具付着。底部ゆがみあり
27	丸皿	C	2.3	10.0	5.1	No.4	35	35	灰	外	焼成やや不良
28	丸皿	C	1.9	9.8	5.0	No.4	45	80	灰	外	
29	丸皿	C	2.4	10.0	5.6	No.5	55	100	灰か		焼成不良
30	丸皿	C	2.1	9.6	5.0	No.5	20	30	灰		焼成やや不良。ゆがみあり
31	丸皿	C	2.2	9.2	5.0	No.4	80	100	灰		
32	丸皿	C	2.0	9.8	5.0	No.4	45	85	灰		
33	丸皿	C	2.1	9.8	5.2	No.5	80	100	灰	外	内底に窓道具付着
34	丸皿	C	2.0	9.8	5.0	No.5	35	30	灰		ゆがみあり
35	丸皿	C	1.9	10.3	5.6	No.5	30	10	灰		焼成過多
36	丸皿	C	2.0	10.0	5.1	No.9?	80	30	灰	外	ゆがみあり
37	丸皿	C	2.2	9.6	5.0	No.5	25	30	灰		
38	丸皿	C	1.9	9.5	5.3	No.5	30	50	灰	外	内底に窓道具付着
39	内壳皿 I	B	1.8	9.8	5.2	No.7	20	35	無		外側面陥凹
40	内壳皿 II	B	2.3	10.0	5.8	No.5	20	20	灰	外	内部輪拭う
41	匣鉢蓋 I	E	2.1	9.6	5.3	No.7	65	65	無		内面に凸線
42	灯明皿	E	2.1	9.6	5.4	No.4	25	35	無		内面に凸線
43	折線皿 I	B	2.1	10.2	5.2	No.4	30	25	灰	外	内部輪拭う
44	折線皿 I	B	1.8	10.4	5.2	No.15.17	30	25	灰	外	内部輪拭う、ゆがみあり
45	折線皿 I	B	1.9	10.6	5.8	No.7	40	30	灰	外	内部輪拭う
46	折線皿 I	B	1.6	9.6	5.2	No.?	30	50	灰	内	内部輪拭う、ゆがみ大
47	折線皿 I	C	1.8	10.4	5.0	No.?	40	100	灰	内	内部輪拭う
48	折線皿 I	C	2.3	10.8	5.6	No.5	10	75	灰	内	内部輪拭う、ゆがみ大
49	折線皿 II	B	2.3	10.7	5.8	No.?	50	75	灰	外	内部輪拭う、鉢袖内粗皿付着
50	折線皿 II	B	1.6	9.8	5.8	No.5	15	25	灰	外	内部輪拭う、ゆがみ大
51	折線皿 II	B	2.2	11.6	5.7	No.5	60	100	灰		内部輪拭う
52	折線皿 II	C	2.0	11.0	5.4	No.7.9	70	80	灰	外	内部輪拭う
53	折線皿 II	C	2.1	10.6	5.8	No.?	30	40	灰	内	内部輪拭う
54	折線皿 II	C	2.4	11.0	5.5	No.5	50	100	灰	外	内部輪拭う
55	折線皿 I	C	—			No.4.5	20		灰	外	印花文と串掛け
56	中皿	C	2.4	13.0	7.6	No.7	70	100	灰	外	ゆがみ大、内面ボロ付着
57	内壳中皿	C	3.4	13.1	8.1	No.?	20	40	灰か		焼成やや不良、黄瀬戸か
58	内壳中皿	C	2.4	13.1	7.1	No.2.7	30	50	灰	外	内部輪拭う、内外面ボロ付着
59	志野中皿	A	3.1	15.6	8.2	No.10	10	10	灰石		
60	志野向付	A	—			No.4	40		灰石		鉢絆
61	志野向付	B	—			No.4	25		灰石	外	鉢絆
62	志野向付	A	3.1	16.6	7.1	No.4.5	10	10	灰石		輪花、鉢絆
63	黄瀬戸向付	C	5.1	14.4	10.6	No.10	10	20	灰	外底に团子ト付着、高台痕	
64	志野向付	B	5.1	13.5	6.1	No.4	5	75	灰石		鉢絆、ヘラ掛け上げ、内底に円錐ビン痕
65	黄瀬戸向付	A	—			No.5	65		灰		ヘラ掛け
66	黄瀬戸向付	A	—			No.5	25		灰		ヘラ掛け
67	擂钵 I	—	—	27.6		No.10	5		擂		

68	彫鉢 I	—		穴Na10	5	開 跡		
69	彫鉢 I	—		穴Na10	5	開 跡		
70	彫鉢 I	—		Na10	5	開 跡		
71	彫鉢 I	—		穴Na10	5	開 跡		
72	彫鉢 I	—		Na5	5	開 跡		
73	彫鉢 I	—		穴Na10	5	開 跡		
74	彫鉢	E	41 112 72	Na5	5 100	無	内底に刻文、内部に丸皿C付着	
75	彫鉢	E	50 120 60	Na7	10 35	無	内底に灰釉小皿付着	
76	彫鉢	E	42 128 88	Na7	40 30	無		
77	彫鉢	E	38 110 68	Na	100 100	無		
78	彫鉢	E	52 122 55	Na5	80 100	無	ぬがみあり、内底に刻文、丸皿C付着	
79	彫鉢	E	81 244 212	Na7	30 50	無	内面に「オ」の印	
80	彫鉢	E	70 172 170	穴Na10	30 30	無	内底に長石釉の製品が付着	
81	彫鉢	E	110 186 155	Na5	35 100	無		
82	彫鉢	E	69 96 63	Na7	20 10	無	体部下端に穿孔	
83	彫鉢	丸底	81 154 129	Na5	100 100	無	内底に天目茶碗付着	
84	彫鉢	丸底	91 152 138	Na7	50 70	無	天目茶碗を焼成	
85	彫鉢蓋 I	E	16 146 90	Na10	45 50	無		
86	ハサミ皿	E	21 95 50	Na5	50 50	無	内	ぬがみあり
87	ハサミ皿	E	21 100 50	Na5	100 100	無	内	ぬがみ大
88	彫鉢蓋 I	E	19 104 48	Na7	80 100	無		
89	彫鉢蓋 I	E	29 104 46	Na7	30 100	無	内	ぬがみ大
90	彫鉢蓋 I	E	18 104 54	Na5	20 20	無		
91	彫鉢蓋 I	E	26 110 58	Na5	20 30	無	内	
92	彫鉢蓋 I	E	25 110 54	Na7	100 100	無		
93	彫鉢蓋 I	E	20 112 63	Na5	75 100	無	内	
94	彫鉢蓋 I	E	21 110 56	Na5	35 100	無	内	内面に凸縁
95	彫鉢蓋 I	E	27 92 60	Na5	30 75	無	内	
96	彫鉢蓋 I	E	20 116 56	Na7	40 100	無	内	ぬがみあり
97	彫鉢蓋 I	E	21 118 60	Na7	25 100	無		

* 1 : A. 付高台 B. 剥り込み高台 C. 剥り出し輪高台 D. 剥り出し内反高台 E. 平底 (第3表～第6表に共通)

第4表 第2次調査1グリッド出土遺物計測表

図	器種	高台	法量 (cm)			注記番号	口縁残 存率%	高台残 存率%	釉面	輪ドチ の痕跡	備考
			器高	口径	底径						
1	天目茶碗	—	10.7			Na2			鉄+銀		鉄釉下に灰釉
2	天目茶碗	—	45 126			Na20	25		鉄		
3	天目茶碗D	C	55 114	46	Na4?	10	50	鉄	ぬがみ大		
4	天目茶碗F	C	57 124	48	Na2	5	50	鉄	ぬがみ大		
5	天目茶碗D	C	59 117	47	Na44.47	65	100	鉄			
6	天目茶碗F	C	61 112	50	Na14	20	40	鉄	ぬがみあり		
7	天目茶碗F	C	59 100	48	Na22	20	40	鉄	ぬがみあり		
8	志野天目D	C	54 130	46	Na22.20	100	長石				
9	筒形碗A	A	(34)	52	Na18		50	鉄			
10	筒形碗B	—	(49)			Na?		鉄			
11	筒形碗B	—	(37)			Na76		鉄			
12	筒形碗B	—	(43)			Na21		鉄		体部内面にボロ付着	
13	筒形碗B	—	(39)			Na76		鉄			
14	筒形碗B	—	(34)			Na18		鉄			
15	筒形碗B	—				Na18		鉄		14と同じもの	
16	筒形碗B	—	(38)			Na18		鉄			
17	筒形碗A	A	(1.1)	54	Na27		25	鉄			
18	筒形碗B	Aか	1.1	70	Na21		鉄			底部内面にボロ付着	
19	筒形碗B	AかC	(5.0)	40	Na21		10	鉄			
20	筒形碗B	—	(5.6)	140	Na21		鉄			外間に縱方向のヘラ削り痕	
21	筒形碗B	—	5.0 145			Na2	15	鉄			底部内面にボロ付着
22	筒形碗B	A	(5.3)	58	Na76		20	鉄			底部内面にボロ付着
23	小碗	C	2.4 62	28	Na18.25	50	100	灰			
24	小碗	C	2.75 53	29	Na24		100	灰			
25	小碗	C	2.3 57	24	Na33	20 30	灰			焼成や不良	
26	小碗	C	2.0 62	35	Na20	35	60	灰か			焼成不良
27	折緑皿I	B	1.8 106	56	Na40.49.2	45	55	灰	外	凸部輪拭う	
28	折緑皿I	B	1.9 107	56	Na22.23.4	70	100	灰	内外	凸部輪拭わざ	
29	折緑皿I	B	1.7 112	54	Na20		灰			凸部輪拭う	
30	折緑皿I	B	2.3 98	60	Na?	15 40	灰			凸部輪拭う	

31	折線皿 I	B	23	11.4	6.2	No.20.23.27	50	70	底	外	凸部軸拭う、菊印
32	折線皿 I	C	21	10.0	5.3	No.20			底	内外	凸部軸拭う
33	折線皿 II	B	19	10.0	5.1	No.36.41.45	50	65	底	外	凸部軸拭う
34	折線皿 II	B	20	11.0	5.7	No.46	15	75	底	凸部軸拭う	
35	折線皿 II	B	25	10.4	5.6	No.55	15	50	底	凸部軸拭う	
36	折線皿 II	B	23	10.0	5.3	No.40 ^p	20	40	底		焼成不良、菊印花
37	折線皿 II	C	20	10.5	5.6	No.21.28	50	65	底	外	凸部軸拭う
38	折線皿 II	C	20	11.0	6.0	No.12.51	35	50	底		凸部軸拭う
39	折線皿 II	C	21.5	11.2	6.1	No.18	45	100	底	内外	菊印花
40	折線皿 II	C			5.4	No.22.27.47.50	3	65	底	外	印花
41	丸皿	B	17	9.6	5.0	No.46	40	30	底	外	
42	丸皿	B	19	10.0	5.0	No.66	90	100	底		
43	丸皿	B	20	10.0	5.0	No.22	30	50	底	外	
44	丸皿	C	17	9.3	4.6	No.53	75	100	底		
45	丸皿	C	20	9.8	5.4	No.35	30	30	底		
46	丸皿	C	17	7.6	4.6	No.42.5.62	40	45	底		
47	丸皿	C	20	10.4	5.6	No.61	45	70	底		焼成やや不良
48	丸皿	C	20	9.0	4.9	No.49.50	30	60	底		
49	丸皿	C	20	10.4	5.8	No.23	40	30	底		窓印、内外面に卓口付着
50	内凸皿	B	20	9.6	4.8	No.62	25	60	底	内外	凸部軸拭う
51	内凸皿	B	18	9.6	5.6	No.22	30	60	底	外	凸部軸拭う
52	灰志野中皿	A	30	12.5	6.4	No.46.47	15	55	灰志野		外底に円錐ピン痕
53	灰志野中皿	A	34	14.2	8.0	No.28	30	25	灰志野		
54	志野丸皿 Aか	17.5	7.4	4.2	No.20	40	30	長石		ゆがみ大	
55	志野中皿 A	31	12.4	6.3	No.?	10	5	長石			
56	志野中皿 A	29	13.2	7.6	No.19	5	10	長石		外底に円錐ピン痕	
57	志野中皿 A	32	14.4	8.0	No.69	20	15	長石			
58	志野中皿 A	36	14.8	7.2	No.22.1	45	50	長石		内外底に円錐ピン痕	
59	志野中皿 A	31	14.8	8.0	No.20	10	15	長石			
60	志野中皿 A	33	12.7	6.6	No.22	20	10	長石		体部下端に円錐ピン痕	
61	志野中皿 A	24	11.1	5.9	No.22.1	25	100	長石		体部下端・内底に円錐ピン痕	
62	片口 C	9.7	14.8	12.5	No.23	25	25	鉢			
63	志野向付 A	36	14.9	9.2	No.1	5	25	長石	高台	鉄絵、ゆがみ大	
64	志野向付 B	4.0	15.8	7.8	No.18	10	20	長石		焼成不良	
65	志野向付 A	43	17.4	11.6	No.20	5	5	長石		鉄絵	
66	香炉	—	6.2		No.21.22.23.27	50		底			
67	香炉 D	6.5	6.0	4.8	No.?	15	100	底			
68	香炉 E	8.5	8.4	5.6	No.11.12.22	55	100	底			
69	茶入 E				No.35			鉢			
70	茶入蓋 C	10	4.0	2.0	No.20 ^p	100		長石		焼成やや不良	
71	茶入蓋 C	0.9	4.2	2.4	No.12	5	90	長石		焼成不良	
72	桶鉢 I	—	27.0		No.2.30	15		鉢			
73	桶鉢 I	—			No.18			鉢			
74	桶鉢 I	—			No.21			鉢			
75	桶鉢 I	—			No.2			鉢			
76	桶鉢 I	—			No.26			鉢		焼成やや不良	
77	桶鉢 I	—			No.71			鉢			
78	桶鉢 I	—			No.2.22.23			鉢			
79	桶鉢 I	—			No.21			鉢		焼成やや不良	
80	桶鉢 I	—			No.2			鉢			
81	桶鉢 II	—			No.SK01			鉢			
82	灯明皿 E	25	9.6	4.8	No.30.39	30	100	蘭			
83	匣鉢蓋 I	E	265	11.0	5.3	No.32	100	100	無		ゆがみあり
84	ハサミ皿 E	23	10.8	5.8	No.40	45	50	無		ゆがみあり	
85	匣鉢蓋 I	E	21	10.6	5.6	No.45	40	100	無		ゆがみあり
86	匣鉢蓋 I	E	21	10.2	5.8	No.?	100	100	無		
87	匣鉢 E			12.0	No.?		75	無			
88	匣鉢 E	4.1	11.8	7.8	No.19	30	100	無			
89	匣鉢蓋 II	—			No.5			無			
90	匣鉢蓋 II	—			No.?			無			
91	匣鉢蓋 II	—			No.?			無			
92	匣鉢蓋 II	—			No.?			無			
93	匣鉢蓋 II	—			No.?			無			
94	匣鉢蓋 II	—			No.62			無			
95	曉台	—			No.23			無			
写真A	灰志野中皿	A			No.20			灰志野		底部外面に円錐ピン付着	
	志野中皿	A			No.20			長石		内面に円錐ピン付着	

第5表 第2次調査2グリッド出土遺物計測表

図	器種	高台	法量 (cm)			注記番号	口縁残 存率%	高台残 存率%	釉面	輪ドチ の痕跡	備考
			器高	口径	底径						
1	天目茶碗 E	D	5.2	10.7	4.6	No.7.11	15	50	鉄		
2	簡形碗 B	—	(5.6)			No.11			鉄		
3	簡形碗 B	—	(15)			No.13			鉄		
4	簡形碗 B	—	(23)			No.7			鉄		
5	簡形碗器 E	(32)				No.36			鉄		
6	折縁皿 II	B	1.9	10.4	5.0	No.19.22.40	40	25	灰		焼成不良
7	折縁皿 II	B	2.2	10.1	5.3	No.54	20	100	灰	内外	凸部釉拭う
8	折縁皿 II	B	2.3	10.8	6.0	No.57		50	灰	外	焼成やや不良、凸部釉拭う
9	折縁皿 II	B	1.6	10.2	5.4	No.7	40	45	灰		釉印花
10	折縁皿 II	C	2.0	10.4	5.8	No.7	30	35	灰		菊印花
11	折縁皿 II	C	2.0	10.0	5.3	No.11	30	50	灰		
12	折縁皿 II	C	2.4	11.6	6.1	No.7	10	55	灰	内外	凸部釉拭う
13	折縁皿 I	B	2.0	11.0	6.4	No.18	30	30	灰		焼成過多、凸部釉拭う
14	折縁皿 I	B	2.3	10.6	6.0	No.44	20	30	灰		凸部釉拭う
15	折縁皿 I	C	2.1	10.7	5.6	No.44 ²	65	100	灰	内外	
16	丸皿	B	1.9	9.2	5.2	No.23	15	25	灰		
17	丸皿	B	1.8	9.8	5.2	No.14	20	15	灰	外	
18	中皿 II	C	2.8	13.2	7.3	No.7.11	25	65	灰		
19	輪糸中皿	C	3.0	13.2	7.7	No.57	45	55	灰		
20	小皿器	E	2.4	10.1	4.8	No.11	75	70	無		焼成やや不良
21	拂み皿	E	1.7	10.1	5.3	No.5	65	100	無		ゆがみ大
22	拂み皿	E	2.0	10.2	4.9	No.24	15	50	無		
23	拂み皿	E	2.2	10.6	5.5	No.5	15	50	無		
24	匣鉢	E	8.0	13.4	13.6	No.11	20	45	無		
25	福鉢 I	—				No.8.11			無		
26	福鉢 I	—				No.53			無		
27	福鉢 I	—				No.8			無		
28	福鉢 I	—				No.50			無		
29	福鉢 I	—				No.14			無		
30	福鉢 I	—				No.49 ²			無		
31	福鉢 I	—				No.7			無		焼成やや不良
32	福鉢 I	—				No.41			無		
33	福鉢 I	—				No.60			無		
34	福鉢 I	—				No.7			無		焼成やや不良
35	福鉢 I	—				No.52			無		焼成やや不良
36	福鉢 I	—				No.21.49			無		
37	福鉢 I	—				No.11			無		
38	福鉢 I	—				No.17			無		
39	福鉢 I	—				No.?			無		
40	福鉢 I	—				No.44			無		
41	福鉢 I	—				No.2			無		
42	福鉢 I	—				No.8			無		
43	福鉢 I	—				No.40			無		焼成やや不良
44	福鉢 I	—				No.42			無		

第6表 第2次調査3グリッド出土遺物計測表

図	器種	高台	法量 (cm)			注記番号	口縁残 存率%	高台残 存率%	釉面	輪ドチ の痕跡	備考
			器高	口径	底径						
1	天目茶碗	C	5.8	11.5	4.5	No.17	50	100	鉄		
2	簡形碗	—	(28)			No.?			鉄		
3	簡形碗	A	5.0		6.6	No.17		35	鉄		
4	簡形碗	C	8.2	10.4	4.6	No.15	35	100	鉄	内面ボロ付着	
5	丸皿	A	1.7	9.7	6.2	No.4	35	35	灰	外	焼成やや不良
6	丸皿	C	2.2	10.2	5.4	No.19	55	85	灰	外	凸部釉拭う、体部下方に团子トチ痕
7	後縁皿	B	2.6	9.6	5.0	No.8	50	70	灰	外	凸部釉拭う
8	折縁皿	B	2.2	10.6	5.8	No.19	25	70	灰	内面	凸部釉拭う
9	折縁皿	B	2.1	10.6	5.8	No.10	65	100	灰	内外	凸部釉拭う
10	丸皿	B				No.4.12	15	70	灰	外	
11	折縁皿 I	B				No.4.12	50	100	灰	内外	凸部釉拭う
12	折縁皿 I	C				No.4.12	25	25	灰	内外	凸部釉拭う
13	折縁皿 I	B				No.10	30	100	灰	内面	凸部釉拭う
14	折縁皿 I	B				No.10	25	100	灰	内外	凸部釉拭う
15	匣鉢	E	9.4	17.4	15.4	No.12	40	40	無		内面に「手」の印
16	匣鉢	E	10.4	14.8	13.2	No.32	40	40	無		図17-匣鉢②
17	匣鉢	E	10.0	15.2	13.7	No.33	100	100	無		図17-匣鉢③
18	匣鉢	E	7.8	14.0	12.4	No.12	30	50	無		
19	匣鉢	丸底	8.5	16.6	13.2	No.30	40	55	無		図17-匣鉢④
20	匣鉢	丸底	8.3	15.7	13.7	No.27	90	100	無		図17-匣鉢⑤
21	匣鉢	丸底	7.8	15.0	13.0	No.26	50	100	無		
22	福鉢 I	E	11.8	28.9	11.2	No.17.26.20	10	100	無		菊印花
23	芳眞B	匣鉢	—			No.?			無		
24	芳眞C	志野向付	—			No.3			鉄石		角柱状の足、内面口付着

第6章 小結

第1節 大窯製品の編年的位置付け

牟田洞窯跡の第1・2次調査で出土した大窯製品の編年的位置について検討を加える（藤澤2002）。

1. 天目茶碗（第7表）

大窯段階の天目茶碗には、削り出し輪高台で口縁部がS字状になるD類、削り出し内反高台で同様の口縁形状を呈するE類、輪高台あるいは内反高台で口縁部が直立するF類があり、D類は古瀬戸後IV期新段階、E類は大窯第1段階後半、F類は第2段階後半に出現すると考えている。

牟田洞窯跡の第1・2次調査では、D類とF類が削り出し輪高台、E類が削り出し内反高台になるよう、個体数をみると削り出し輪高台が圧倒的に多い。当該期の天目茶碗の細分は体部の扁平化が基準となり、図化した資料を検討するとD類・F類の殆どが第4段階前半に位置付けられるが、1グリッドでは志野製品（図11-8）が存在することから第4段階後半も確実に出土している。E類も各調査区から出土しており、6トレンチの図7-4が第4段階前半、2グリッドの図16-1が第4段階後半にそれぞれ位置付けられる。F類では1グリッドの図11-4・5・7は第4段階前半に位置付けられるが、6トレンチの図7-5は第3段階後半まで遡る可能性がある。以上のように、天目茶碗は第4段階前半を主体とし、第4段階後半のものも確実に存在するが、第3段階後半まで遡るものは極めて少ない。

2. 小皿類（第9表）

大窯段階の小皿類には、端反皿・稜花皿・丸皿・稜皿・内禿皿・折縁皿・志野丸皿・志野菊皿など様々な器種が存在し、端反皿・稜花皿・丸皿は第1段階前半、稜皿は第2段階前半、内禿皿・折縁皿は第3段階前半、志野製品は第4段階後半に出現する。また高台の調整別にみると、付高台のA類と削り込み高台のB類は第1段階から出現するが、削り出し高台のC類の出現は第4段階前半以降と考えている。

牟田洞窯跡の第1・2次調査では、折縁皿と丸皿が主体で、内禿皿は少なく、稜皿や志野製品はほとんど確認できなかった。釉薬別では鉄釉稜皿・鉄釉内禿皿・長石釉の志野丸皿が各1個体で、他はすべて灰釉製品であった。以下、図化遺物について器種ごとに検討を加える。丸皿は各調査区で出土しているが、最も多いのが削り出し輪高台のC類で、第4段階前半を主体とするようである。6トレンチの図7-20・22には体部下方に円錐ピンが付着し、1グリッドの図12-60・61は志野製品と溶着することから、第4段階後半まで焼成されたことは確実である。

稜皿は3グリッドで1個体のみ確認されたにすぎない。器高が高いことから第3段階後半まで遡る可能性が高い。内禿皿は、6トレンチと1グリッドで削り込み高台のB類のみが出土し、やはり第4段階前半を主体とするが、1グリッドの図12-50は第3段階後半まで遡る可能性がある。

折縁皿は最も出土量が多く各調査区で出土しているが、付高台のA類が全く確認されていないことから、第4段階前半以降に位置付けられる。すなわち折縁皿は第4段階前半を主体に、6トレンチの図8-46・50、1グリッドの図30、2グリッドの図9など体部が扁平で器厚が厚いものは第4段階後半に位置付けられる。志野丸皿は1グリッド（図12-54）から1個体のみの出土で、志野菊皿は1点も確認できていない。

以上、小皿類の編年的位置付けは、第4段階前半を主体に第4段階後半まで確実に存在しており、第3段階後半まで遡るものは極めて少なく、天目茶碗の編年的位置付けと同様の結果を得た。

3. 揣鉢（第10表）

大窯段階の揣鉢には、口縁部が外側に折り返され縁帯を形成するI類と、口縁部が内側に折り返され

るⅡ類があり、両者とも大窯の全期間を通じて焼成されているが縁帶の形状はバラエティーに富む。

牟田洞窯跡の第1・2次調査では、擂鉢の個体数は極めて少ないが各調査区で出土している。口縁部の形状ではⅠ類が主体で、Ⅱ類は1グリッド(図13-81)で1点のみの出土である。口縁端部がやや膨らむa類、口縁端部に膨らみを持つb類、口縁端部が角張るc類に分類され、a類は第3段階後半、b類は第4段階前半、c類は第4段階後半にそれぞれ位置付けている。破片数ではb類が最も多く、c類・a類の順となる。すなわち、擂鉢は第4段階前半を主体に第3段階後半から第4段階後半のものまで存在しており、天目茶碗や小皿類の編年観とは若干のズレがある可能性が高い。

4. 筒形碗(第8表)

大窯段階の筒形碗には、付高台の筒形碗A類と、削り出し輪高台の筒形碗B類があり、前者は大窯第3段階前半に、後者は焼成中に窯から引出冷却による「瀬戸黒茶碗」として第4段階前半に出現すると考えていた。しかし、牟田洞窯跡の第1・2次調査の筒形碗は、いずれも付高台で引出冷却された可能性が高いことから^(註1)、今回の報告では筒形碗の分類基準を変更し、形状により半筒形をA類、切立形をB類とした。

筒形碗A類は6トレンチ(図7-11)・1グリッド(図11-9)・3グリッド(図18-3)で、筒形碗B類は各調査区から出土している。編年表と対比するとA類(半筒形)はいずれも第4段階前半に、B類(切立形)では殆どが第4段階後半に位置付けられる。ただしB類は、1グリッドを例にすると、高台脇が回転ヘラ削り調整される図11-17・18、体部外面にロクロ目を残す図11-19・21・22、継方向にヘラ削り調整された図20など細分が可能で、第4段階前半に出現した可能性がある。筒形碗の型式設定について再検討する必要がある。

5. 中皿・向付類

黄瀬戸製品は第4段階前半に、志野製品は第4段階後半に出現するものとして当該期の編年は組み立てられている。中皿・向付類については、これまで型式を設定しておらず編年表には提示していない。

牟田洞窯跡の第1・2次調査では、黄瀬戸向付は各調査区で出土しており、全体量が少ない3グリッドが最も多く、全体の形状が判るものでは浅鉢形が主体である。3グリッド(図18-12~14)では底部内面に胆鑿手法による文様が描かれたものは皆無であり、これを第4段階前半の古い様相と捉えると黄瀬戸製品については今後細分できる可能性がある。志野中皿・向付は、6トレンチと1グリッドを中心に各調査区で出土し、浅鉢形・皿形・筒形など様々な形態が確認されている。ただし、志野製品には付高台と削り込み高台のものは存在するが、削り出し輪高台のものが皆無であることが重要である。3グリッド(写真16C)では志野平向付が出土しているが他に志野製品は1点も出土していない。灰志野製品は1グリッド(図12-52・53)において無文で付高台の中皿がまとまって出土している。同形の志野中皿の最上位で焼成されており、両者の同時性は確実で灰志野製品は第4段階後半に出現した可能性が高い。

第2節 各調査区の性格

最後に、主要器種の編年観及び遺構の状況から、各調査区の性格を述べていく。

1. 第1次調査6トレンチ

6トレンチは、荒川豊蔵氏の窯の南東上方に設定された調査区である。6トレンチでは地山が東から西へと傾斜しており、作業場の遺構は確認されなかった。大窯製品は100個体以上出土しており、小皿類、碗類、中皿・向付類の順で、調理鉢類は極めて少なく、他の調査区と比べ、志野製品が最も多く出土し

ており、匣鉢やヨリ輪、輪ドチなどの窯道具を大量に含んだ層が確認された。これらから、6トレンチ周辺に大窯期の窯に関係する遺構があったものと推測された。遺物の年代観については、第3段階後半に位置付けられる天目茶碗が確認されるが、折縁皿に付高台のものがみられないことや、志野製品が一定量出土することなどから、主体は第4段階前半から第4段階後半に位置付けられるものである。ただし、志野製品に削り出し高台のものが存在しないことから、第4段階後半でも古い様相を示す。

2. 第2次調査1グリッド

第2次調査の1グリッドは、6トレンチの西側に設定された調査区である。1グリッドでは、北側に作業場と思われる平坦面が検出している。6トレンチと同様に匣鉢やヨリ輪、輪ドチなどの窯道具を大量に含んだ層が確認された。また、南東には地山による傾斜がみられ段が確認され、段と傾斜の境には横倒しとなった粘土円柱及び窯道具が検出された。この粘土円柱及び窯道具類は、土留めの役割をもっている可能性が推測される。このすぐ北西からはSP01が検出しており、SP01の内部が2段落ちになっていることからロクロピットの可能性が指摘されるが、地山がやや傾斜していることから断定することは出来ない。この平坦面がどの窯に付随するかの問題であるが、最も近い2号窯や3号窯との関連が想定される^(註2)。1グリッドでは6トレンチと同様に100個体以上の大窯製品が出土しており、同様の器種組成や形態を持つことから、6トレンチと同時期に位置付けられる。

3. 第2次調査2グリッド

2グリッドは、2号窯の上方、荒川農業の作業場北の平坦面に設定された調査区である。2グリッドでは平坦面は確認されず、地山が西から東に下がっており、大窯期の作業場は確認されなかった。現代遺物がグリッドの南側、荒川氏の作業場のすぐ脇でまとめて出ていることから、昭和期の物原であったようだ。大窯製品の出土量は少なく、器種組成は異なり擂鉢が他の調査区と比べて割合多く出土している。ただし、主要器種の編年的位置付けは6トレンチや1グリッドと同様で、志野製品も一定量類似したものが出土しており、2号窯や3号窯に関連する遺構が近くにあったと推測される。

4. 第2次調査3グリッド

3グリッドは、1号窯の上方に設定された調査区である。西側に作業場と思われる平坦面と排水溝などが確認され、この溝の中からは匣鉢や窯道具が検出されている。東側からは平坦面は確認されず、地山面が傾斜していた。北西隅では地山が下がっていたが、そこに盛土をして平坦面を形成している。周辺からはSP01が1ヶ所確認されたが柱穴かどうかは不明である。平坦面や排水溝から、1号窯に付随する作業場であったと想定される。

大窯製品の出土量が最も少なく、器種組成も他の調査区とは大きく異なっており、黄瀬戸向付の比率が高く、志野製品が殆どみられず、しかも腐植土からの出土であることから混入である可能性が高い。また小皿類のC類が他の調査区と比べて極めて少ないと、確実に第4段階後半に位置付けられる遺物が認められないことから、少なくとも1グリッドで確認された作業場より古い時期に使用されていたようで、大窯第3段階後半まで遡る可能性が高い。

以上より各調査区の年代観は、6トレンチ・1グリッド・2グリッドでは概ね大窯第4段階前半から後半（16世紀末～17世紀初頭）に、3グリッドは大窯第3段階後半から第4段階前半（16世紀後葉）に比定される。

（森まだか・藤澤良祐）

（註1）青山辰男氏のご教示による。

（註2）可児市教育委員会による平成27年度の調査によって、4号窯は荒川農業の窯であった可能性がでてきたため4号窯は除外される。

第7表 濑戸美濃大窯編年表① (藤澤2002より転載)

		天目茶碗D	小天目	平碗
古 後 瀬戸 新 1480	IV			
	前 大 窯 1			
1530	後半 大 窯 2			
1560	前半 大 窯 3			
1590	後半 大 窯 4			
1610	前半 大 窯 末 造房式 登窯 第1小期			

第8表 濑戸美濃大窯編年表②(藤澤2002より転載)

		燈籠碗			灯明皿	
		燈籠碗				
古 瀬戸 IV	後					
1480	新	丸碗A			小杯	
大 窯	前半					
	後半					
1530	前半					
大 窯	後半					
1560	前半					
大 窯		丸碗B				
	後半					
1590	前半					
大 窯	後半					
志野 4						
末						
1610	連房式 窯室 第1小期				0 10cm	

第9表 濑戸美濃大窯編年表③ (藤澤2002より転載)

			腰折皿	縁軸小皿
古 後 瀬 戸:新 1480	N	端反皿	丸皿	倭花皿
前 大 窯 1 後 半 1530	a	b	c	d
前 大 窯 2 後 半 1560	c	Aa Ba	b Ab Ac Bc	d
前 大 窯 3 後 半 1590	Aa Bd	Ad Bd	c d e	Aa Ba Ab Bb
前 大 窯 4 後 半 末 1610 過房式登窯 第1小期	Ca Cb	Af Bf	f	Ac Bc Bd Bg
	Cc B	Ag Bg	g	志野丸皿・菊皿 鐵絵皿
	Cd	Bh	h	波板菊皿
	Cd			
			0 10cm	

第10表 潤戸美濃大窓編年表④(勝澤2002より転載)

		1480				1530				1560				1590				1610			
		前半	大窓	1	後半	前半	大窓	2	後半	前半	大窓	3	後半	前半	大窓	4	後半	末	連房式登窓 第1小窓		
鉢 類	A 系																				
	B 系																				
	C 系																				
頭 類	I 系																				
	J 系																				
	K 系																				
檻 類	D 系																				
	E 系																				
	F 系																				
柱 類	G 系																				
	H 系																				
	I 系																				

引用・参考文献

- 加藤唐九郎 1933 「黄瀬戸」 寶雲舎
- 高木康一 1936 「美濃に於ける黄瀬戸、志野、織部」「陶磁」 第8卷第2号 東洋陶磁研究所
- 加藤土師萌 1953 「織部」「陶説」 日本陶磁協会
- 荒川豊藏 1959 「志野」 陶磁全集第4巻 平凡社
- 一瀬武 1966 「美濃焼の歴史」 郷土文化研究会
- 奥磯栄範 1971 「美濃焼」 光琳社
- 橋崎彰一・井上喜久男 1976 「美濃古窯跡群」 財観光資源保護財団
- 橋崎彰一 1976 「美濃の古陶のながれ」「美濃の古陶」 光琳社
- 今井静雄 1976 「中世の施釉陶器」「美濃の古陶」 光琳社
- 奥磯栄範 1976 「可児地区」「美濃の古陶」 光琳社
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」「研究紀要 V」 瀬戸市歴史民俗資料館
- 井上喜久男 1988 「美濃窯の研究（一）—十五～十六世紀の陶器生産—」「東洋陶磁」 第15・16号 東洋陶磁学会
- 斎藤基生 1989 「研究紀要 1 牟田洞窯」 財荒川農業資料館
- 田口昭二 1993 「美濃窯の焼物」 多治見市教育委員会
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸美濃大窯編年の再検討」「研究紀要 第10輯」 財瀬戸市埋蔵文化財センター
- 可児市 2005 「可児市史 第一巻 通史編 考古・文化財」
- 高橋健太郎他 2006 「窯ヶ根窯跡発掘調査報告書」 土岐市教育委員会
- 可児市 2007 「可児市史 第四巻 自然編・民俗編」
- 亀谷泰隆 2013 「弥七田織部・弥七田窯概説」「弥七田織部展団録」 可児郷土歴史館
- 春日美海 2015 「昭和前半期の元屋敷窯発掘史—高木康一と小川栄一、文化財保護の視点から—」「元屋敷窯発掘史—美濃桃山陶の再発見と古窯跡発掘ブームの中で—」 土岐市美濃陶磁歴史館
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2006 「尻無1号窯跡発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2007 「上県2号窯跡第1次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2008 「上県2号窯跡第2次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2009 「上県2号窯跡第3次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2010 「上県2号窯跡第4次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2011 「上県2号窯跡第5次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2012 「上県2号窯跡第6次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2013 「上県2号窯跡第7次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2014 「上県2号窯跡第8次発掘調査概要報告書」
- 愛知学院大学文学部歴史学科 2015 「上県2号窯跡第9次発掘調査概要報告書」



6 トレンチ発掘調査前全景
(北から)

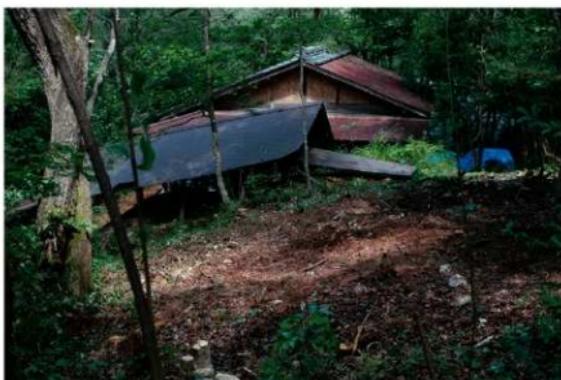


6 トレンチ完掘後 (南から)



6 トレンチ西壁 (東から)

図版1 第1次調査6トレンチ関係



1 グリッド発掘調査前全景
(南東から)



1 グリッド拡張部設定後全景
(南東から)



1 グリッド完掘後 (南東から)

図版2 第2次調査1グリッド関係 (1)



SP01 粘土円柱（北西から）



SP01 棟出時（北西から）



SP01 完掘後（北西から）

図版3 第2次調査1グリッド関係（2）



2 グリッド発掘調査前全景
(東から)



2 グリッド完掘後全景 (東から)



SX01 (南から)

図版4 第2次調査2グリッド関係 (1)



粘土土坑土層断面（北から）



2グリッド南壁（北から）



SK01・SK02完掘後（北から）

図版5 第2次調査2グリッド関係（2）



3グリッド発掘調査前全景
(南から)



3グリッド拡張前 (南から)



3グリッド完掘後全景 (北から)

図版6 第2次調査3グリッド関係 (1)



SD01 検出時（北から）



SP01 検出時（東から）



SP01 土層断面（南から）



SP01 土層断面（東から）



3 グリッド北側拡張部（東から）



3 グリッド南側拡張部（東から）

図版7 第2次調査3グリッド関係（2）



図版8 第1次調査6トレンチ出土遺物（1）



図版9 第1次調査6トレンチ出土遺物 (2)



図版10 第1次調査6トレンチ出土遺物（3）



図版 11 第2次調査1グリッド出土遺物 (1)



図版12 第2次調査1グリッド出土遺物 (2)



図版13 第2次調査1グリッド出土遺物 (3)



図版14 第2次調査1グリッド出土遺物 (4)



図版15 第2次調査2グリッド出土遺物



図版16 第2次調査3グリッド出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおがやかまあとぐん むたほらかまあと							
書名	大萱窯跡群 牟田洞窯跡第1・2次発掘調査概要報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	愛知学院大学考古学発掘調査報告							
シリーズ番号	22							
編著者名	藤澤良祐・森まさか・森村知幸・石浜莉那・伊藤真央・垣見太郎・片岡優歩 片山尚樹・加藤友也・濱崎健・半場千晴・日比野将之・宮田実歩・森秀人 山本駿・上田悠太・木藤慎・小林万容・佐藤美鈴・鈴木愛実・高野夏姫 堀内有・三ツ本樹純							
編集機関	愛知学院大学文学部歴史学科							
所在地	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 TEL 0561-73-1111							
発行年月日	平成28年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
牟田洞古窯跡	岐阜県可児市 久々利柿下 入会352番地	21214	07548	35度 23分 58秒	137度 08分 11秒	20130902 ~20130907 20140818 ~20140905	約14m ² 第2次調査 約48m ²	第1次調査 第2次調査 学術研究
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
牟田洞古窯跡	生産遺跡	安土桃山時代	窯業生産に 係わる作業 場2か所	天目茶碗・筒形碗・小碗・ 丸皿・内秃皿・折縁皿・ 擂鉢・黄瀬戸向付・志野中 皿・志野向付・灰志野中 皿・開香炉・窯道具				

愛知学院大学考古学発掘調査報告22
大萱窯跡群 牟田洞窯跡第1・2次発掘調査概要報告書

発行日 2016・3・31

発行者 愛知学院大学文学部歴史学科

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel (0561) 73-1111 Fax (0561) 73-8179

編集 考古学コース 藤澤良祐・森まどか

印刷 株式会社あるむ
